

根 来 寺 坊 院 跡

昭和58年度

和歌山県教育委員会



鎮壇覽狀



金箔押し土師皿

例 言

1. 本書は、国庫補助事業、昭和58年度根来寺坊院跡発掘調査の概報である。
2. 発掘調査は、社団法人和歌山県文化財研究会に委託し、実施した。
3. 本書の遺構写真は、窪田雅秀、村田、辻林が、遺物写真は、窪田が撮影した。
4. 遺物の整理、実測、トレース等、本書の作成には、窪田雅秀、味村万喜子、岩鶴裕香里、上野道代、大谷登詩、が協力し、窪田、村田、辻林が執筆し、辻林が編集した。
5. 遺物実測図と遺物写真に付した番号は一致する。

調 査 組 織

調査委員

- 羯磨 正信 (和歌山県文化財保護審議会委員)
巽 三郎 ()
都出比呂志 ()
藤沢 一夫 ()

調査員

- 辻林 浩 (和歌山県教育庁文化財課主査)
村田 弘 (社団法人和歌山県文化財研究会技術員)

調査補助員

- 窪田 雅秀 (大阪学院大学学生)

事務局局長 伊藤 正也

次長 北野 全美 (和歌山県教育庁文化財課主幹)

梅村 善行 (課長補佐)

幹事 挑野 真晃 (第2係長)

主任技術員 松田 正昭 (第2係主査)

書記 森本 一臣 (主事)

西村 保彦 (社団法人和歌山県文化財研究会書記)

中西みちる ()

富田 美保 ()

NG83の調査

はじめに

本年度の発掘調査は、根来寺坊院跡発掘調査第1次10ヵ年計画の第4年次にあたる。

過去、昭和51年度の大規模農道建設に伴う発掘調査や紀ノ川用水建設に伴う発掘調査、あるいは町道や住民会館建設に伴う発掘調査などの緊急発掘調査、あるいは、昭和55年度からの発掘調査により、山内の様相や山外の町家についてはある程度の成果を得ることができた。特に、当面の目的であった遺物全体における天正13年（1385）というメルクマールは確立できたものと思われる。

今後の残された課題としては、山内における立地条件の差による坊・院の構造を明らかにし、その集合体としての中世根来寺の構造を解明する作業が必要であり、中世根来寺の発展過程を明らかにすることにある。ひいては、これが中世根来寺を、今後史跡指定に向けての基本資料となるものと考えられる。

なお、できれば、根来寺を中心とした周辺地域の町家を含めた、経済体としての性格も明らかにしたい。しかし、町家地区にはすでに民家が密集するという条件を持つため、民家の建て替え等による偶然の機会にたよることとなるため、長年月が必要となるであろう。

一、調査

根来山内の遺構の立地は、すでに何回にもわたり記述していることではあるが、大きく三種に分けることができる。まず、平野部に立地する遺構、谷部に立地する遺構、斜面部に立地する遺構群である。

平野部の遺構については、大規模農道関係調査や昭和56・57年度の調査で大まかにではあるが、坊・院跡の単位を明らかにできたとされる。また谷筋に立地する遺構は、昭和55年度の奥の院北側の調査により一部は発掘調査が行われている。ただ、山内の最も大きな谷筋であり、天正13年の根来攻めの際、山内への攻略ルートとなったといわれる現大門北方の谷筋には未だ調査の手は加えられてい



第1図 遺跡の位置

ない。

本年度は、大規模農道のルート変更のための資料を得るため、菩提川沿い現旧廟の南側(NG83-1)と、民家新築に伴い大規模農道沿いで昭和51年度の調査地点の南側、NG82-3の東側にあたる2カ所の発掘調査を実施した。

NG83-1は、天正の兵火後の再建はないらしく、江戸期の遺構は確認できなかった。最下層は旧菩提川の流路となるようである。

NG83-2は、東側約4mが東側に延びる塔頭と考えられ、西側約4mはNG82-3、NG80-2の一部と同一塔頭となるものと考えられる。

二、NG-1の遺構と遺物

1. 遺構

本調査区は、遺構そのものは複雑ではない。

まず、最上層である第1次遺構では、調査区北端において小石を叩きしめた道路跡と考えられる遺構が焼土層下で検出された。なお、この焼土層は部分的に検出されるものである。道路跡に伴う遺構としては、その南側に雨落ち溝と東西に約8m延びる石列、小ぶりの扁平な石を用いた礎石群があるが、調査区の規模、南端の攪乱等により、建物の規模等については明らかでない。

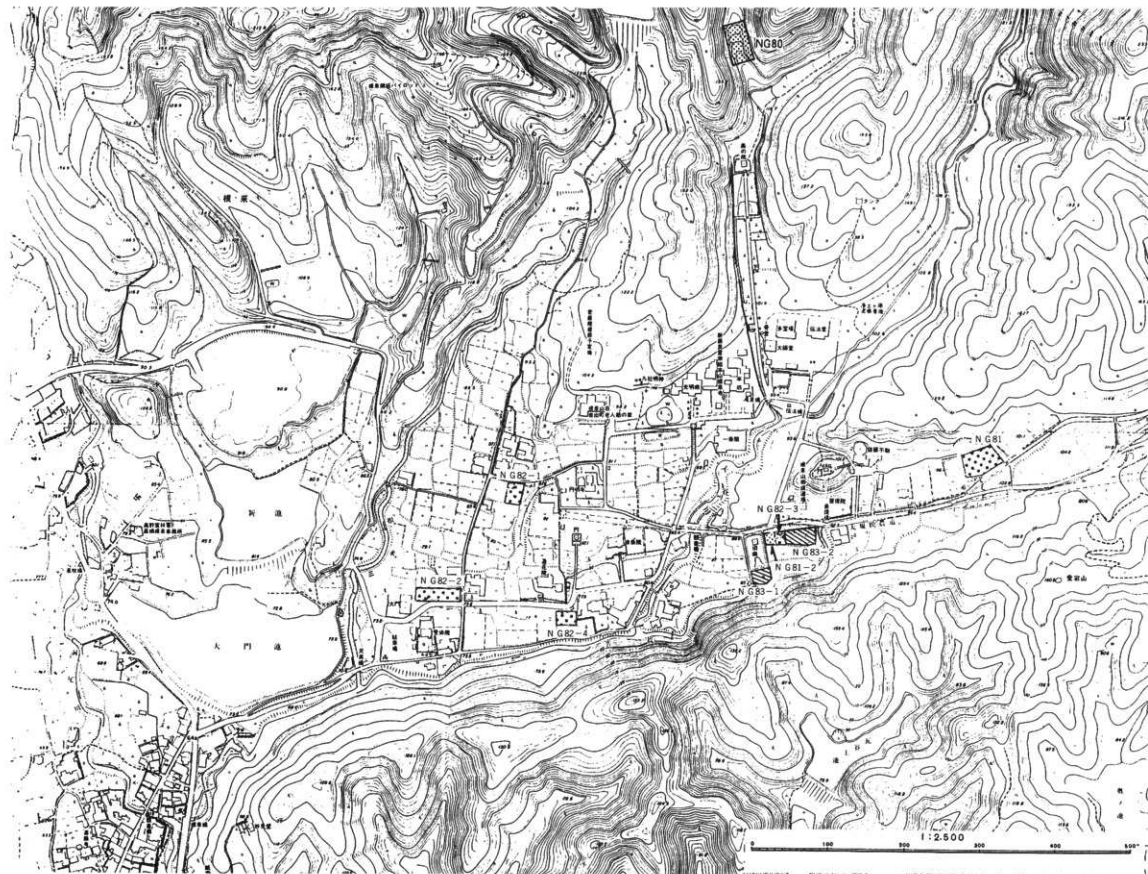
本遺構面が天正の兵火時の面と考えられる。

第2次遺構面の主体をなす遺構は、やはり建物跡であるが、第1次遺構面の建物とは異なり、礎石はすでに無く、径約1mの根石群を検出したにとどまる。調査区南側は、菩提川の砂防ダムの建設や護岸工事のため攪乱を受けているため、建物の全容は明らかにできなかったが、現存する根石群でひろってみると東西6間×南北4間の規模までは確認できる。この面での他の遺構としてはSE-1がある。この井戸はその上端に板碑1枚を架構し、隙間を大小の石で塞がれていた。

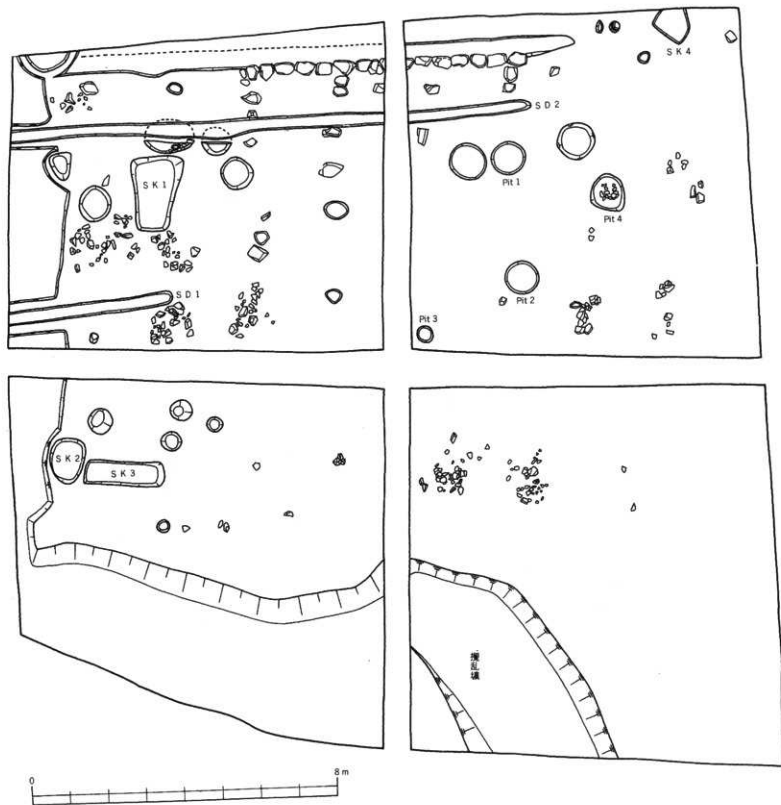
この井戸に伴うものとして、扁平な石を敷いた流し場と思われる遺構がある。なお、この遺構面を造成する際に行われたと思われる地鎮具が検出されている。地鎮は穴を掘り地鎮具を入れたものなのか、平坦面で行われたものなのかは明確ではないが、その出土状態からみて、基壇状の平坦面上で行われたものではないかと思われる。地鎮遺構は、その西端、南端がセクションベルトにかかるため全容は明確でないが、セクションベルトの外側ではこれに続くものが検出されていないため、これで完結するものと思われる。その配置は、まげ賢瓶が西南隅に置かれ、これと対応する様に方形に6ヶ所に土師器皿が1枚～4枚の組み合わせで計12枚が置かれたものである。

次に第3次遺構面として、調査区東側約4m地点に見られる東西に延びる石垣(SV-1)の積まれた時期がある。この時期は本遺構以外不明である。

次に第4次遺構面として、調査区南端を東西に延びる石垣(SV-2)がある。この石垣の東端



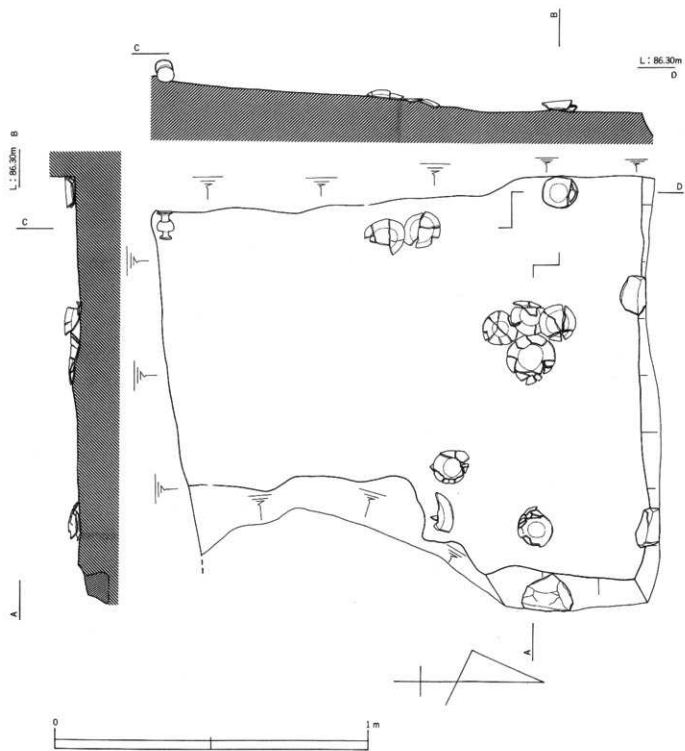
第2圖 山内地形圖



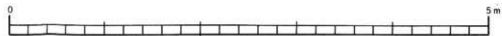
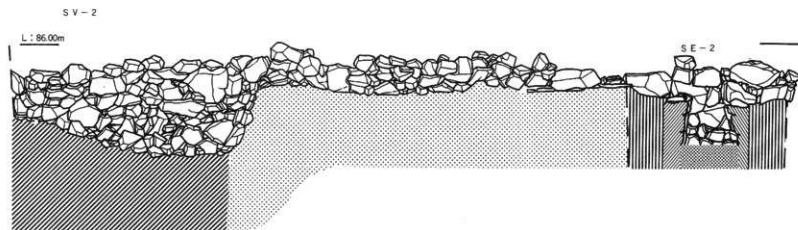
第3図 NG83-1 第1次遺構面平面図



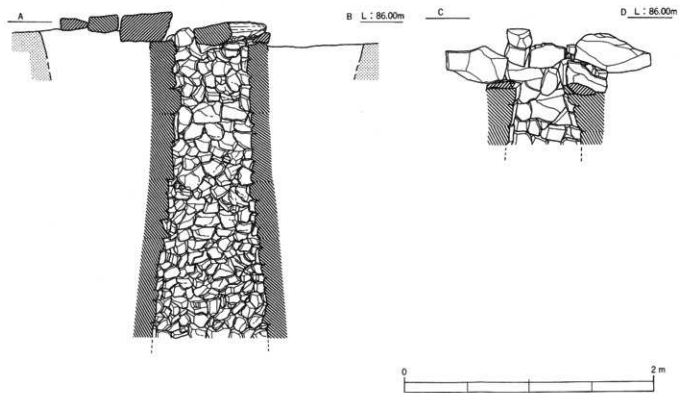
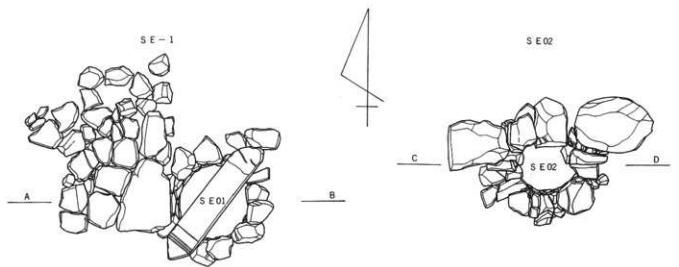
第4図 NG83-1 第2次遺構面平面図



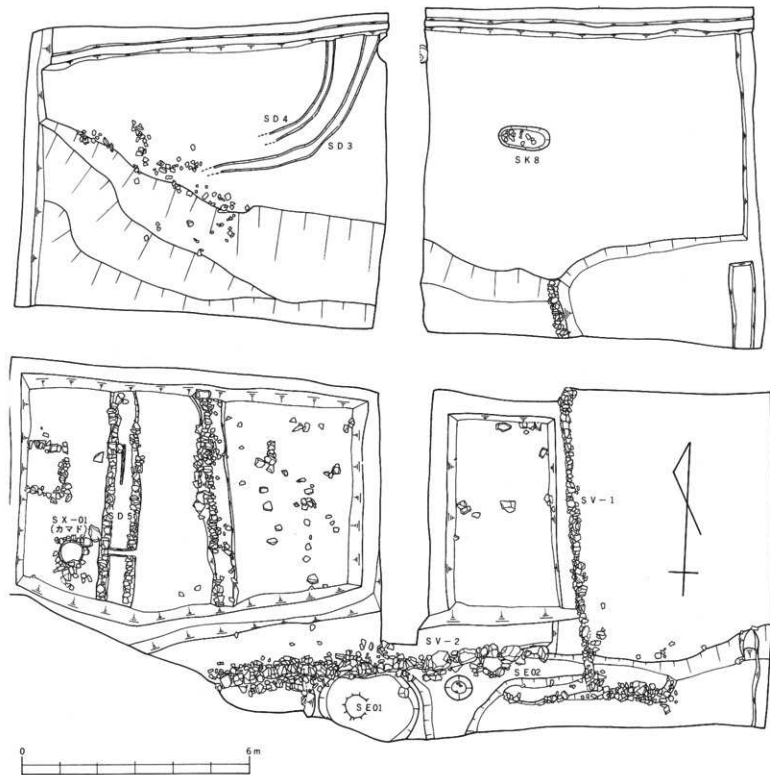
第5图 地鏡具検出状況



第6图 石垣立面图



第7图 井戸実測図



第8図 NG83-1 調査終了時遺構平面図

部で石垣下に井戸(SE-2)が検出されている。

次に第5次遺構面として、調査区西南区中央部で検出した石列とその東側で検出した礎石群がある。しかし、この面まで下げた部分が狭いため、遺構面の全容は不明である。

次に第6次遺構面であるが、この面での調査面積も狭いため遺構の検出は少ないが、幅約60cmの1～3段に積まれた石積み溝(SV-5)により敷地が東西に画されていたものと思われる。溝の東側はこの面まで掘り下げていないため遺構は不明であるが、西側の敷地では、円形に石を組んだ内径約60cm、深さ約20cmのカマド(SX-1)や、面を外側にもつ割石を方形に廻らした遺構(SX-2)や、SV-5の西側肩に据えられた礎石が検出されている。

以上のように、本調査区での検出遺構は単純なものであるが、これは最深の遺構面が地表下約3mという深さに達するため、土溜めを行わず調査を続行することに不安を感じたため、調査区 $\frac{1}{4}$ ずつを階段状に下げたことにもよる。いずれにしても15世紀代から焼亡の時期までの間に菩提川を埋立てた悪条件の土地に、ひんぱんに敷地の改変及び建て替えがうかがえる地区である。

2. 遺物

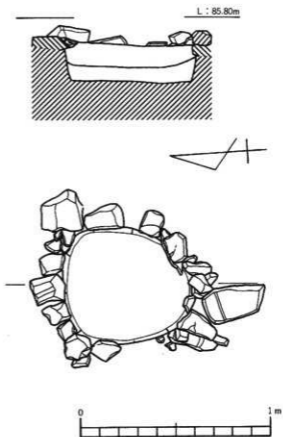
a 第1次遺構面までの出土遺物

青磁 (図1-1～3・図版16)

(1)は口縁部が「く」の字状に強く折り曲がり、さらに端部が上方に立ち上った盤である。(2)も同じく青磁の盤で、内面底部に、一条の沈線をめぐらす。やや淡い草緑色を呈する。(3)は底部のみの出土であるがおそらく(1)と同タイプの盤となるものであろう。草緑色を呈し軸は厚く、粗い貫入をみる。

白磁 (図1-4.5・図版16)

ともに端反りの皿である。(4)は貼り付け高台で断面三角形を呈しやや内傾する高台をもち、貫付



第9図 カマド実測図

部の軸は丁寧に削り取られている。(5)はやや甘い台形状の高台を有し、畳付部に砂の付着がみられる。

染付 (図1-6・図版16)

端反りの皿である。体部外面に牡丹唐草を配し、内面見込み及び口縁端部内面下方に圈線をめぐらす。内面見込みに文様が描かれているが不明である。

国産陶器 (図1-8~14・図版17)

①7は瀬戸の花瓶で、底部は回転糸切となっている。備前はすべて壺・甕で、壺①0は玉縁状の口縁で肩部に櫛目による波状文をもつ。甕では口縁部形態が、玉縁状のもの①2と、玉縁の平べいとなったもの①3、さらに玉縁外面に太い凹線をもつ波状になったもの①4とがある。

瓦 (図2-18)

巴文の軒丸瓦で煙し焼成されておらず灰色を呈する。

b 第2次遺構面までの出土遺物

白磁 (図3-19・図版18)

内面見込みに片切彫による刺花文を描く。高台は浅く削り出した輪高台で底部は露胎。器壁は薄くシャープな器形である。釉はやや青味をもち、一見青白磁を思わす。

須恵質鉢 (図3-20~22・図版18)

いずれも内外面横ナデ調整を施す。口縁端部を上方にややつまみ上げただけのもの②1と、端部を上下にやや拡張されたもの(21・22)がある。東播系のこね鉢である。

瓦器 (図3-45.46・図版18)

④6は体部内面に細い暗文が密に施されており、外面にも数条の磨き痕を認める。横ナデ、指圧痕が顕著である。④5は煙し焼成が不完全で灰白色を呈し硬質である。内面に数条の暗文が施される。高台は退化が著しくわずかにその痕跡をとどめるに過ぎない。

土師質土器 (図3-23~26、図4-27~44・図版18.19)

②3は土釜である。銜の位置は高く口頭は短い。口縁端部を内側に折り曲げ、上面にわずかな凹みをもつ。(24~29)はいずれも「く」の字状に外反した口縁の端部を上方につまみ上げている。赤茶色ないしは暗茶色を呈し、1~2mm大の細石粒を多く含む土鍋である。

皿は大別すれば口径11cm前後の中皿(30.31.32)と、8cm前後の小皿がある。このうち③0③1③3③7③8の5個体はよく水簸された胎土で白色を呈し、いわゆる白土器と呼ばれるものである。他は橙茶色ないし黄白色を呈し、クサリ礫を多く含む。

その他

④7は軒平瓦当で均整唐草文を配す、④8は滑石製の羽釜で銜は短かく1cm程度である。④9⑤0は石製の硯。⑤1は砥石である。

c 第3次遺構面までの出土遺物

青磁 (図5—52・53・55・56・図版21・52)

52は片切彫りによる蓮弁文碗。底部外面は総軸の後、内面を削り取っており赤茶色を呈する。見込み部にヘラ描きによる文様を描くが軸が厚く、また大半を欠損しており図案については不明である。淡い草緑色を呈す。53は端部が外反する碗で口縁内面下方に一条の沈線がめぐらる。5556はともにヘラ先による粗略な線描の蓮弁文碗である。剣頭は55ではまだ単位をもつが56ではその意識を失いかけており粗雑な一本の線に近づきつつある。

白磁 (図5—54・図版21)

口縁の外反する皿である。通常の端反りの皿とはやや異なり端部を鋭く押さえている。また軸が厚く、青味がかかった白色を呈す。

国産陶器 (図5—57・58・図版21)

57は常滑の壺である。口縁は折り曲げたのち端部を上下に拡張させ、いわゆる「N」字状口縁をなす。常滑焼IV期前半に該当するものであろう。58は備前の壺である。やや角ばった玉縁状口縁をもち、肩部にヘラによる太目(3mm)の平行線が描れる。

須恵質鉢 (図5—59—61・図版21.22)

いずれも灰色を呈し、少量の細石粒を含む。内外面とも横ナデで、体部の凹凸が顕著である。東播系のこね鉢である。

土師器皿 (図6—63—93・図版22.23)

口径15cmをはかる大皿(64・65)と10cm前後の中皿、7cm前後の小皿に大別される。大皿は体部下半を指押え、口縁部は比較的丁寧な横ナデを施しやや外反する。中皿は大皿と同じ調整をなすもの70と、底部から丸味を帯びて立ち上るもの83、2段の横ナデにより体部に凹凸をもつもの86がある。また特異なものとしては高台を持つもの、器高2cmをはかる小皿82、底部内面に刷毛目を残すもの84、同じく小皿で内面にあて布によると思われる格子状の模様を残すものなどがある。なお、このうち白土器は(76.82.86.89.90)の5個体を数える。

瓦 (図7—94.95・図版23)

94は軒平瓦瓦当。均整唐草文を配し、周囲に圈線をめぐらす。凸面は主としてタテ方向のヘラ削りののちナデによる調整を加えている。凹面はわずかに細目の布目痕を残す。九瓦瓦当95は、彫りの深い巴文で周囲に珠文を配する。

その他のものとしては、石製のルツボ96がある。

d 最終掘り上り面までの出土遺物

白磁 (図8—98—100・図版24)

98は外反した口縁端部に水平面をもつ碗である。体部外面はヘラ削り。軸はやや黄色がかかった灰

色を呈し、砂粒の移動痕である小孔が認められる。99は肥厚した玉縁状の口縁をもつ碗。(100)は削り出しによる浅い輪高台で底部は露胎となっている。

須恵質鉢 (図8-135~138・図版26)

口縁形態が断面三角形に近いもの(136)と、端部を上下に拡張させナデによる凹線をもつもの(137)、さらにその中間形態をなすもの(135・138)がある。いずれも灰色ないしは暗灰色を呈し胎土に砂粒を多く含む。

瓦器 (図8-110,122,124,125,132,133,134・図版24,25)

碗(110,132~134)と小皿(124,125)がある。碗は口径14cm前後、体部内面にヘラ磨きによる暗文が施される。口縁部の横ナデ、及び体部外面の指圧痕の強いことが特徴である。

皿は口径8cm前後、器高1.4cmをはかる。碗、皿とも焼成は良好で硬質である。

土師質釜 (図-101~104・図版24)

いずれも口縁部は「く」の字状に外反させ端部の上方へのつまみ上げが顕著なもの(102)とそのまま押さえるもの(101)、丸く折りまげるもの(104)が見られる。推定口径30cm前後。黄茶色ないしは赤橙色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

土師質皿 (図8-111~121,123,125~131・図版24~26)

口径11cm前後の中皿と8cm前後の小皿に大別される。うち中皿はその調整から、口縁部の横ナデが強く端部が肥厚し丸みを帯びるもの(113)と体部中央が肥厚しているもの(107)、底部から丸みを帯びて内湾気味に立ち上るもの(114)の3種が見られる。白土器の中皿(105,106,108,109)は、総じて器壁が薄く、シャープな立ち上りをみせ口縁部の横ナデが強い。白土器小皿(117,118)は前述の瓦器小皿の器形に酷似する。その他、ヘソ皿(130,131)も見受けられる。

瓦(図9-140,141・図版26)ともに丸瓦瓦当で巴文を配する。焼成は良好。

e 地鎮具 (図10-142~154・図版31)

(142)は銅製の覧瓶である。器高9.1cm、最大径5.0cmを測る。肩部と体部下半に稜をもち頸部及び脚部に凹線状の凹凸がめぐる。底部は接合による。また緒紐によって四方からくくっていったと思われる痕跡が認められる。

(143~154)は土師質の皿である。12個体のうち2個体は口径15cmの大皿(143,144)、他は9cm前後の中皿である。いずれも同一タイプで体部外面の指押えが強く、やや外反し肥厚する口縁部は丁寧な横ナデによりおさえている。

なお、前述の覧瓶と類似するものが、一乗谷朝倉氏遺跡の県道改良工事に伴う発掘調査の第43次調査で、やはり地鎮具として出土をみている。

f 遺構内出土遺物

SK-2 (図10-155・図版32)

(155) は土師質小皿。口径7cm、器高1.5cmをはかる。

S K-4 (図10-156・図版32・33)

(156) は備前の壺である。頸部は短く、肩に櫛目による波状文が描かれている。暗茶褐色を呈し焼成は良好。胎土に少量の砂粒を含む。(159) も同じく備前の壺である。

S K-5 (図10-157.158・図版32)

(157) は白磁の皿である。小片のため詳細は不明だが、おそらく口径10cm前後、体部下半は露胎で基筒底となる小皿であろう。(158) は土師質の土釜である。鐏は退化しており1cmにも満たず、粗雑な貼り付けである。

S K-7 (図10-160.161・図版33)

(160) は備前焼の盤である。口縁部は緩やかに内弯し端部をナデにより丸く押さえている。内面体部下方に櫛目による細い波状文を描く。染付(161)は口縁が端反りの皿である。高台は削り出しで尻付部軸は丁寧に削り取っている。体部外面に牡丹唐草文、内面見込に羯磨文が描かれている。上田分類染付皿Ⅱ類に該当するものである。

S X-1 (図10-162~165・図版33)

(162、164) は土師質中皿(165)は小皿である。いずれも淡黄白色を呈し、胎土、焼成とも良好。

S E-1 (図11-166~169)

(166) は瀬戸の灰釉皿である。胎土は黄白色でややザラついた感じである。(167~169) は瓦器碗である。

S D-5 (図11-171~193・図版34~36)

(171) は土師質の羽釜である。頸部は短かく、1cmほどの鐏がつく。内面口縁部下方にやや粗い刷毛目が見られる。土師質皿(172~193)は口径18cmの大皿(173)と12cm前後の中皿、さらに8cm前後の小皿がある。白土器が多い(172、173、177~190)。また(190~194)はヘソ皿である。他はくすんだ茶灰色ないし暗灰色を呈する。

三、NG83-2の遺構と遺物

1. 遺構

本調査区である水田の区画は1枚であるが、遺構の区画は2単位にわたる。

第1次遺構面となる江戸時代の遺構は、水田化の際の削平により、遺構の大半は失われ、深く掘られた遺構だけが残存していた。

この時期の遺構には、溝(SD-1、SD-2、SD-7、SD-9)や土壇等がある。これら溝のうち確実に江戸時代の遺物を出土するものに、SD-4、SD-9がある。他の溝は天正期の遺構を切って造られたものである。特にこれが顕著なものにSD-5がある。この溝は、天正期の遺構面をU字状に切り込んで掘られた内に、割石を左右に一列づつ並べ、その上をやはり割石で蓋をし、さらにその上に小割石や瓦片を敷きつめたもので、昭和51年度の調査時にも検出されており、甕ピットと呼ばれる埋喪遺構および石敷遺構を切って造られたもので、本年度の調査でも昭和51年度の調査で検出した石敷遺構の続きが検出されており、やはりこれを切って造っている。

SD-4は、素掘りの幅の広く浅い溝に、小割石や瓦片、陶磁器片を投げ込んだ暗渠で逆F字状を呈する。以上2条の溝が東側の単位に属するもので、西側の単位に属する溝にSD-9がある。

SD-9は、割石を溝の掘り方内左右に一列づつ並べた上に割石や丸瓦で蓋をしたもので、西流するように造られている。東端は開渠となっており丸瓦(図37-587)が樋の受口となっている。

次に、第2次遺構面となる天正期の遺構面であるが、調査区全面から焼土層が検出されるわけでないため、遺物の出土しない遺構の時期決定は困難をきわめるが、この面での検出遺構には、基壇状遺構・井戸(SE-1)、溝(SD8、SE-10)、地鎮遺構2ヶ所、溜井(SF-1)の上層、SK-5、SK-8、柵列等がある。このうちSK-5、SK-8、柵列は多少古い時期になる可能性がある。

まず、基壇状遺構であるが、基石に板碑と割石を用いたものであるが、南辺、東辺の基石は欠失している。使用されていた3枚の板碑のうちの1枚に梵字の下に「曆応四」の文字が刻まれている(図44)。

SD-8は本来SE-1に続くものであると思われるが、井戸から南へ約5mはすでに壊されていた。また、長期間使用されていたらしく、部分的な積み替えが何度も認められる。SD-10は、東流しSD-8に流れ込む溝である。江戸時代の溝は西流するのに対し、この時期の溝は西流する。

地鎮遺構としたものは2基ある。まず地鎮1としたものは径約60cm、深さ約5cmを測る穴の周囲に割石を据え12枚の土師質皿を上向きに重ねたものである。NG83-1で検出した地鎮の土師質

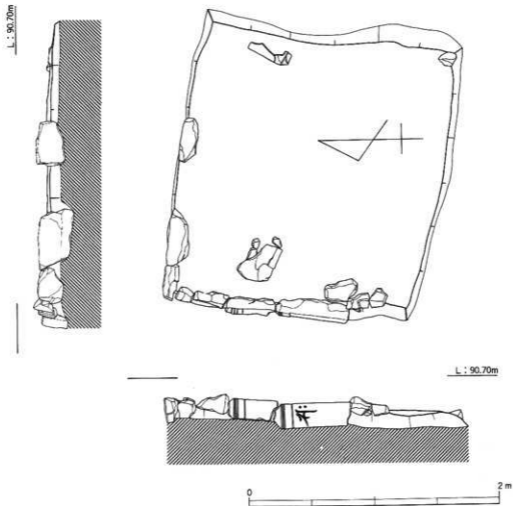


第10図 NG83-2 第2次遺構面平面図

皿も12枚であったが、12枚ということに意味がある可能性が考えられる。

地鎮2としたものは、一辺約45cmの隅丸方形の掘り方を持ち、深さ約7cmを測る穴の中央部径約7cmになるように割石を廻らし、その中に山石の小礫を敷き、まず土師質小皿を脇に置き、中央部に中皿2枚の口縁部を合せ置かれたもので、内側には何かを入れていた可能性がある。地鎮遺構としたが他の性格の遺構の可能性を考える必要があろう。

溜槽は、長辺1.5m、短辺1mを測るが不正長方形で2度の作り変えがみられる。新しい方がこの時期に伴うものである。西から流れてくる溝が溜槽北西隅に流れ込み、東南隅からSD-8に流出するように造られており、流出口には平瓦が使用されていた。古い方の時期のものも、流入口および流出口とも位置は変わらないが、溜槽自体の東西辺が多少長くなるだけである。底面は、地山をやや凹ませている。

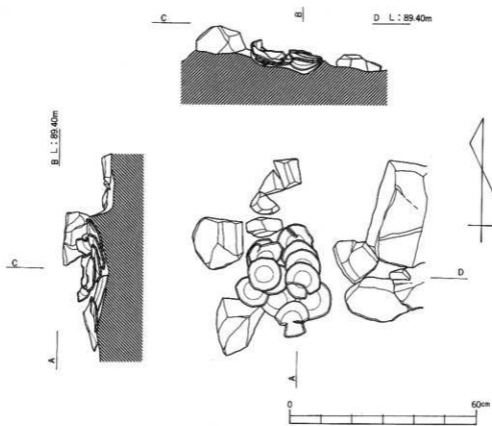


第11図 基壇状遺構実測図

土壇（SK-5）は、調査部分で長辺約4m、短辺約2.5m、深さ約1.5mを測る長方形を呈するが、調査区外へ延びるため全容は、不明である。ただ調査部分のうち西北隅で、掘り方が北西方へ延びるため、全体像は長方形ではないものと考えられる。また、本遺構は壁面が約1mの厚さで焼けていたが、底面はさほど焼けていなかった。ただ、土壇底に置かれた石のうち数個は焼けていた。

土壇（SK-8）は、SK-5の北側はあり、深さ約50cmを測る不整形を呈する。SK-5と同時に整地を受けたものと思われ、土壇内出土物のうち何点かはSK-5出土の遺物と接合することができる。

SK-5、SK-8の時期に伴う遺構として、SE-1の南側で検出した東西長約5mの石垣がある。石垣は基底から2段の積みだけが残っていただけである。この石垣は、SD-8の西側の壁の一部にも利用されており、SD-8のうちでは最も積みのよい部分があたる。

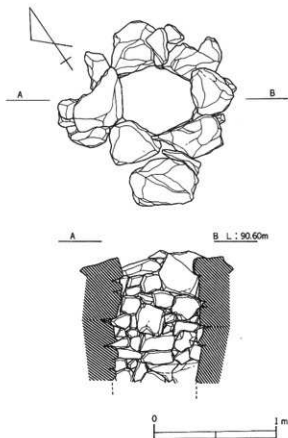


第12図 地鎮道構実測図

柵列 東側塔頭敷地で、多少南に振った方向で約9mの長さを検出した。柵杭の間隔は、0.6~1mである。

最終遺構面で検出した遺構には、井戸（SE-2）、土壙（SK-1、SK-2、SK-3、SK-10、SK-11、SK-18）溝（SD-14）がある。

井戸（SE-2）は基壇状遺構の直下で検出したもので、自然流路上に構築されている。SK-5の時期に伴う可能性がある。井戸に石で蓋をして放棄する手法のものは、これまで何例もあるが、これまでは板碑が使用されたものばかりであったが、この井戸の蓋は片岩の板石2枚を使用し、隙間を割石で覆ったものである。径約2.2mの円形の掘り方の中に上部径約70cm、底径約1m、深さ2.9mの規模で割石が積まれたものである。底は岩盤が浅いU字状に掘られている。石積みは、石積みの強度に対応する



第13図 井戸1実測図

ものなのか、人間が石を積む際の高さ限界なのか明らかに3回の積みの変化が認められる。

土壙のうちSK-18は特異な性格を持つ。径約1.4m、深さ0.4mを測る素掘りのもので、特異な器形をもつ土師質の大皿と産地が不明の筒茶碗、銅銭6枚が出土したもので墓の可能性の残るものである。本遺構も、SK-5に伴う可能性がある。

溝（SD-14）は、調査区北端で幅約1.4m、南端では幅約2mを測り、中央部で溝底がやや高くなるものの、総体として南側へ傾斜する大きな溝である。同一場所に石組みの溝が造られていたため最終掘り上りでは2段掘りの感がするが本来はU字状の素掘りの溝であったと考えられ、溝の肩よりやや溝内に入った所に杭の打ち込み跡が多く残る。

自然流路、調査区全体を西南隅から東北隅に向い斜に横切っているもので、広い所で幅約6m、狭い所で幅約5m、遺構面からの深さは平均で約70cmを測る。現菩提川は、東坂本から北山の山麓際を流れているが、菩提橋のところで、急に角度を変え落差をもち、前山の南山麓際を流れているが、今回調査を実施した地点で緩やかなカーブで流れを変えた方がより自然な感じがする。とすれば、当自然流路がこれにあたりそうな感じがする。

本地区での遺構の出現期は、日常雑器として最も破損しやすく、多量に使用される土器である瓦器や土師器からみると、瓦器の終末期から白土器の出現期と考えるのが妥当であろうと思える。また、出現期の建物は、礎石を持たず掘立柱建物が主体となるようである。もともと、東側の塔頭寺院の遺構の残存状態がよくないため、明瞭ではない。

2. 遺物

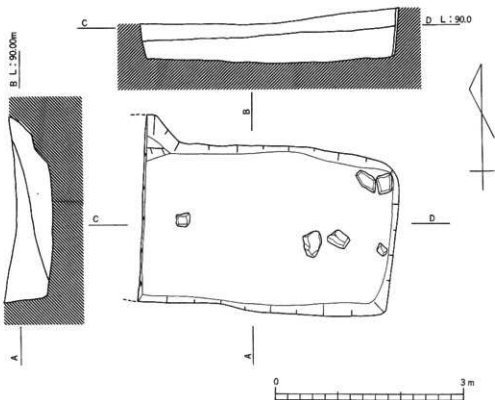
a 第1次遺構面までの出土遺物 (図12～図15-194～266)

青磁 (194～199)

碗には比較的シャープな作りで、薄く透明感のある灰色の強い釉がかかり、体部には回転ヘラ削り痕を残し、内面見込みに印花を施したもの (194)と、直口ぎみで片切彫りの鏡蓮華弁文をもつもの (195) とがある。盤 (328) は、全面施釉後畳付部だけ釉を丁寧削り取っている。皿には、腰折れで口縁部内面に櫛描きの波状文をもつ稜花皿がある。(199) は、口縁部近くに円孔を体部に隔丸方形の円窓を持つもので草緑色の釉がかかる器種の不明なものである。

白磁 (図12-200～206)

梅瓶 (262) は外底を削るにより高台を削り出している。



第14図 SK5実測図

皿 小ぶりのもの (201、202、204)と、大ぶりのものがあり、いずれも貼り付け高台で端反りの口縁のものである。外底に「キ」の擦痕が見られるもの (202) もある。(205) は菊皿、(206) は盃で、ともに内面見込みに輪陶枕がある。

染付 (図12-207-210)

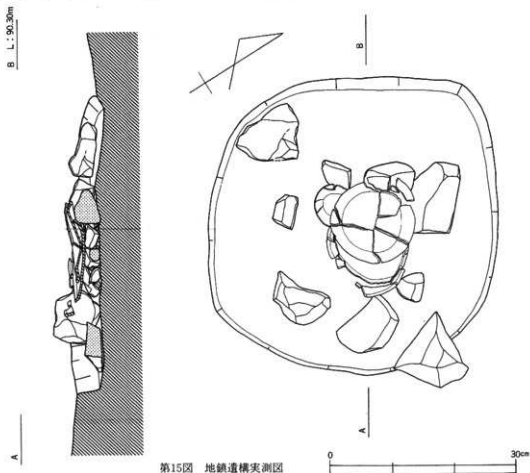
碗 (207-209) と皿 (200) とがある。(210) は口縁の直口するもので、口縁部外面に波濤文帯が巡らされている。(208) は体部外面に「99」文を配したもので、内面見込みにも同様の文様が配されている。(209) は牡丹唐草文が配されている。(210) は基筋底のもので、口縁部外面に波濤文帯、体部下半に蕉葉文帯を持ち、内面見込みに草花文が描かれ、体部下半に2条の圏線、口縁部に1条の圏線が描かれている。

褐釉系陶器 (図12-211-213)

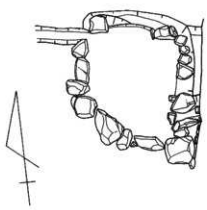
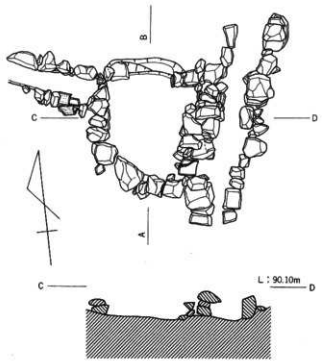
いずれも天目茶碗の底部である。(213) は両面から丁寧に打ち欠き再利用をはかっている。

美濃瀬戸系陶器 (図13-214-218)

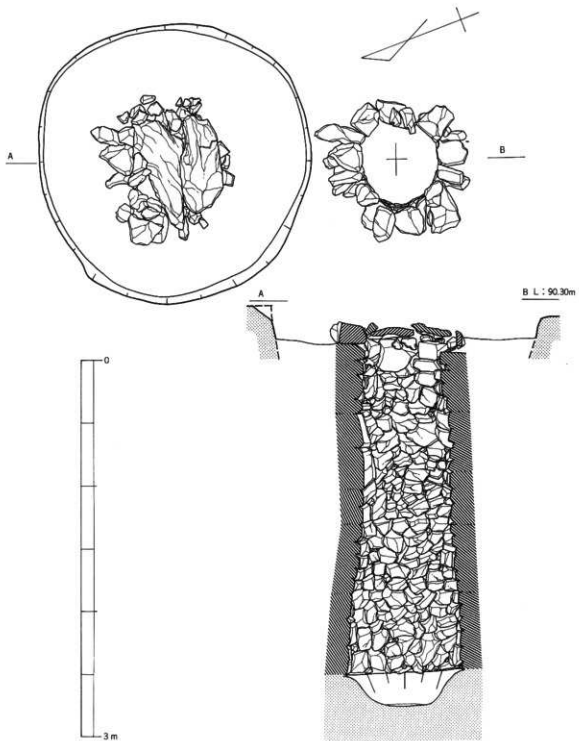
おろし皿 (214・218) は、大形で深く、粗く深いおろし目を持つもの (214)と、浅くおろし目も浅いもの (218) とがある。(214) には3足が付く。(216) は水滴である。



第15図 地鎮遺構実測図



第16图 溜州实测图



第17图 井戸2实测图

備前焼 (図13・14、219～226)

壺 (219～224) とスリ鉢 (225) と甕 (226) とがある。壺には大形のもの (222～224) と小形のもの (219～221) がある。スリ鉢は、口縁端部がまっすぐにおさめられたものである。

土師質・瓦質土器 (図14—227～229)

いずれもナデあるいは刷毛調整を行ったのち、スリ目を施したものである。(229) は小ぶりでも薄く作られ、粗いスリ目が施されている。

唐津系陶器 (図14—230)

碗になるもので、高台は削り出している。

土師質皿 (図14・15—231～263)

(213) は金箔押しの皿である。口縁部は強いナデのため器壁が薄くなり外反ぎみになる。

白土器 (239～237、259～261)、赤土器 (238、243～355、262) とがあり、いずれも口縁部が強く横ナデされたものである。(238) は口縁部外面近くまで指頭痕が残るあまりみられないタイプのものである。(257、258) は口縁部が外反する。(263) は高台のつくもので椀になるものと思われる。

瓦器 (図14—364)

薄い作りで焼成がよい。指頭痕は顕著でない。

瓦 (図14—265)

右廻りの巴文の外に鋸歯文が廻る。外縁の上端に8ヵ所のヘラによるV字状の削り取りがある。

筭 (図14—266)

身は打出しで上端部は欠失しているが銅板をかぶせている。

第2次遺構面までの遺物 (図16・図17—267～303)

青磁 いずれも雷文帯をもつが、体部内外面に劃花文をもつもの(267) と、蓮弁文をもつもの(268) がある。

白磁 (269) は盃で高台は削り出しである。底部外面に「宝」の墨書がある。

褐釉陶器 (270) 長胴の甕で緩く肩がはり、肩部に接合時の段をもつ。

国産陶器 (271～274) (271) は天目茶椀であるが口縁部は屈曲せず直口するものである。(273) は鉢で、高台は貼り付けである。(274) はおろし皿であるが3足が付くものであり、おろし目は深い。

唐津系陶器 (275) は削り出し高台の椀である。内面見込みに重ね焼きの陶枕跡が3ヶ所残る。

土師質鍋 (276) は口縁が「く」の字状に外反し、口縁端部を内側につまみ出したものである。

土師質壺 (277) は口縁部が玉縁状になったものであるが、備前焼の小形品の壺によく似ている。

土師質皿 (278~302) (278~280) は口径15~17cmを測る大皿であり、(281~284) は口径10cm強の皿であり胎土とも同一である。他は根来寺に通用のものである。

3. 最終遺構面までの遺物 (図18~図22-304~373)

青磁 (304) はヘラ描き蓮弁文を持つ碗である。

国産陶器 (305~310)

(305) は貼り付け高台をもつ中形の碗である。(306) は口縁端部が強く外反する平底の皿で内面見込みに櫛描きの文様がある。(307) は常滑焼の甕で口縁部が欠損するが短い垂下口縁になるものである。(308) は備前の大形壺である。(309) は口縁端部を平らにおさめた古手のスリ鉢である。(310) は口縁が波状になった天正の兵火時にかかる甕である。

瓦質土器 (311~319) いずれも刷毛調整のちスリ目を入れたこね鉢で、特に (313) は不定方向の刷毛調整の残りが著しい。(320) は火鉢で口縁部外面にスタンプによる文様がある。

東播系須恵質土器 (321・322) こね鉢で、いずれも口縁端部が上方に立上る。

土師質鍋 (323) は口縁が「く」の字状に外反し端部をつまみ上げたものである。

土師質皿 (324~370) (324~369) は大形・中形・小形、あるいは白色、赤色の違いはあるにしてもいずれも根来寺通用のものである。(370) は貼り付け高台をもつ碗である。

瓦器 (371・372) (371) は口縁端部が内に折れ立ち上る碗である。高台は断面三角形の貼り付けである。(372) も同様な高台をもつが、内面見込みにループ状の暗文をもつ。

砥石 (373) 4面とも使用されているが一面にのみ、のみの削り跡が残る。手持ちの砥石である。

d 遺構出土の遺物

S K-1 出土遺物 (図23-374~382)

土質土器 (474~381) は白土器 (379~381) はナデが強くシャープなものであるが、赤土器は口縁部のナデも弱く底部には指頭痕が残る。瓦器 (382) は断面三角形の貼り付け高台をもつもので、内面見込みにループ状の暗文をもつ。

S K-2 出土遺物 (図23-383~389)

(383) は口縁がわずかに垂下するこね鉢である。土師器皿には白土器 (385、386、388、389) と赤土器 (384、387) の別がある。

S K-3 出土遺物 (図23-390~400)

白土器 (394~397) と赤土器 (392~393、398~399) があるが、392は口径17.5cmを測る大皿である。(106、107) はヘソ皿である。(391) はおそらく3ヵ所に内耳をもつ火鉢と思われる。(390) は美濃瀬戸系の鉢であるが、破損後砥石として利用されたらしく断面が磨かれている。

S K-5 出土遺物 (図24~図29、401~467)

青磁(401、402)には碗と盤がある。碗(401)はへら描き蓮弁文を持つ。盤(402)は口縁端部を上方に引き上げたタイプで、体部内面にノミによる蓮弁文がみられる、釉は外底までおよぶが高台よりで輪状に削り取られている。

白磁(403~420) 皿と盃がある。皿(403~419)はいずれも強く端反りのするもので、高台は貼り付けである。口径は14~15cmの間におさまるものである。(403)には「弘治年造」が(404~410)には「大明年造」、(411)には「福」の青花銘がみられる。疊付部は内外両面から釉を削り取り、尖った断面をもつ。(419)は以上のものに比べ口縁の反りは小さく、端部が丸くおさまられている。高台はやはり貼り付けである。盃(420)は口縁部がやや外反する。内底に釉の掻き取りがみられる。

染付(421~423) いずれも口縁の外反する皿で、内面見込みには草花文が描かれている。高台は貼り付け高台である。釉はやや青味がかっている。外底には釉が刷毛塗りされている。又口唇部はいわゆる口缸がけである。なお、3点とも口唇部の一カ所に凹みとゆがみがみられるが、これは釉をかける際の指のつまみ部分にあたるものと思われる。梅瓶(426)は、底部からロクロで引き上げられたのち、頸部で口縁部を接合したのち彩をかけている。高台は削り出したものである。

備前焼(424、425、427~430、436)

壺(424) いわゆるスズメ口と呼ばれるものである。(425)は徳利の首の部分である。内面にはしぼり目が顕著に残る。(428)は頸部の立ち上りの少ない壺で肩部に櫛書きの波状文が施されている。(427)は玉縁状の口縁を持つもので、(428)同様肩部に櫛幅の狭い波状文が施されている。(429・430)は水屋甕でよく肩が張り、口縁の立ち上りの高いもので体部中央に1条の三角凸を廻らし双耳を持つ。

常滑焼(431)はいわゆるN字口縁を持つ甕である。

丹波焼(432)は小さな玉縁状の口縁を持つもので肩から体部にかけて灰釉がかかる。

美濃瀬戸系陶器(433~435) いずれも天目茶碗である。(434・437)は体部から口縁部への屈曲は弱い口縁部は外方に強く屈曲する。

火舎(437)は瓦質のもので3足が付く。口縁部内外面はナデで仕上げているが、外面口縁部以下は指押えののち縦方向へへら磨きを施している。なお、足が付される部分に蕨手文がスタンプされている。

土師質皿(438~462)ほとんどが口縁部の強いナデのため口縁が肥厚する根来寺通有のものである。特異なものとして、内底に刷毛調整があり、体部に指頭痕が顕著に残り、口縁部にナデ整形を行ったもの(438)がある。(463、464)は砥石である。

瓦(465~467) いずれも左廻りの巴文を配し、外に珠文を配したものであるが、珠文の粗く大

きいもの(466)と、細く小さいもの(465、467)とがある。

SK-8 (図30-468~470)

備前焼甕(468) 二石入の甕である。口縁部の折返しをナデた時の稜線が認められるが、波状には到っていない。

土師質皿(469、470) いずれも同じプロポーシオンを持つ大皿(470)と中皿(469)である。(469)の方が、口縁部のナデが強いため、(470)に比べ口縁の外方への屈曲が強い。なお、(469)内面には7回の刷毛目調整がみられる。

SK-10 (図30-471~479)

土師質鍋(471) 体部から口縁が「く」の字状に外反し、口縁端部を内傾気味につまみあげたもので、最大径は胴部中央あたりにくるものと思われる。

土師質皿(472~478) 赤色系(472~474)、白色系(475~478)がある。赤色系は同タイプの中皿であり、口縁部下に指頭痕が強く残るが、(472)の口縁部のナデは他に比べ強いものである。白色系の中皿(475、476)は口縁部のナデは強いが、ナデ直下の指頭痕はゆるいナデにより平滑化されている。白色系小皿(479~478)は口縁部に強いナデがみられる。

SK-11 (図31-481~485)

土師質羽釜(481)は、口径が小さく器高も低い小形のものである。鋳の貼付後の処理は上部は丁寧にヨコナデで調整されているが、下部はつなぎ目が顕著に残る。鋳の先端は、下方に丸味を持つ。内面は右下方向に丁寧に刷毛調整が施される。口縁部端部は、内方向につまみ出されている。

瓦質土器(482)は口径の大きなもので、内面はナデによる整形ののち、粗くて、比較的深いすり目が施される。外面は縦方向への静止ヘラ削り調整である。

土師質皿(483~485) いずれも赤色系の小皿で、口縁部のナデの強いもの(483、485)と口縁部のナデは弱い、口縁端部を再度ナデルことにより、やや内湾ぎみに仕未したもの(484)とがある。

SK-18 (図31-486~493)

白磁(486) 皿の底部で、貼り付け高台をもつものである。

土師質皿(487) 口縁直下から指押えの指頭痕が顕著に残る皿で、底部から斜め上方に一度立ち上り、その後外方へ強く屈曲し、口縁部が再度内湾気味におさめられた特異な器形をもつもので、器肉も1mm前後と非常にうすく作られている。

筒茶碗(488)

竹筒を模したようなプロポーシオンを持ち下段の節様のところまで灰釉がかかる。ロクロで引き上げられたもので、外底面に「皿」の窯印を持つ。

銅銭 (489~493)

(489、491) は、元豊通宝、(490) は治平元宝、(492) は、天聖元宝である。(493) は、銕がひどく、判読不明。

S K-19 (図31-494、495)

土師質皿 (494) は、口縁部に弱いナデが施され外面全体に、指頭痕が残る中皿である。(495) は、強いナデにより底部と口縁部の間に稜が出来ている。

S E-1 (図31-496~503)

梅瓶 (496) 口縁部と体部を接合してのち施釉されたもので、口縁部内外と外面全体に細い貫入がみられる。

丹波焼壺 (497) 口縁端部を引き出すことにより玉縁状口縁にした壺である。

瓦貫こね鉢 (498) 大形品で口縁部のナデは強い。内面は刷毛調整の浅いスリ目が施されている。外面は横、縦方向への削りが施されている。

土師器皿 (499~503) (499) はやや丸底気味の底部から口縁部が外方に屈曲する大皿である。(500、502) は同一の器形をもつが(500)は口縁部が櫛状の工具でナデられている。(501、503)は口縁部のナデが強いため口縁端部が肥厚するいわゆる根来寺通有のものである。

S F-1 (図32-504~512)

備前焼甕 (504) 口縁部は折り返されているが、断面が半円形を呈する。体部外面は頸部直下から細い刷毛目調整が施されている。

瓦質土器 (505、506) いずれも30cmを超える大形品である。口縁部のナデが凹状に強いもの(505)と丸味を持たせてナデたもの(506)とがある。いずれの内面にも刷毛調整ののち目の粗いスリ目が施されている。外面体部のケズりは縦方向へのケズりだけのもの(506)と、口縁直下に横方向へ一廻へら削りを行ったのち縦方向へへら削りを行ったもの(505)とがある。

土師器皿には白色系(509、512)と赤色系(507、508、570、571)がある。

地鎮具-1 (図32-513~524)

いずれも口縁部まで指押えが行われているが、口縁部は強くナデられているため指頭痕が消されたもので口径は12cm前後におさまるものである。

地鎮具-2 (図32-525~527) (525、526) は口縁のナデが強いため、口縁端部が肥厚するタイプのものである。(527) は指押えの跡をナデることにより平滑化しているが、指頭痕の凹凸が残る。底部がやや厚くなりヘソ皿気味になっている。

S D-3 (図33-528)

丸瓦 (528) は、内面には布目及び布をはがすための紐跡が残るが、切りはなし後のハケ調整が施されている。玉縁部はしぼり出したらしく、内面にしぼり目がみられる。端部に四面にへら

削りが行われている。銀化が著しい。

S D—4 (図33—524—546)

白磁皿 (529) 大形の皿になるもので、高台は貼り付け高台で背の高いものである。

唐津系陶器 (543, 535) (534) は口縁端部が外方へ引き出された鉢になるもので、腰部の削り出し凸帯気味の部分まで深緑色の釉が刷毛塗りの白濁釉の上にかけている。高台は削り出しである。(534) は皿になるもので、内外面とも施釉されているが、火中しているため釉調は不明である。

備前焼 (536) は口縁が折り返えされた玉縁状を呈する壺である。

東播系須恵器鉢 (537) 口縁が玉縁状になったもので、口縁下端と上端をナデ整形しているため口縁部外面がやや波状に見える。

染付 (530—533)

皿 (530—532) (530) は基筒底の皿で疊付部の軸はふき取られている。(531) には動物の頭の部分、(532) にはシッポの部分が内面見込みにみられる。(531) の外面には牡丹唐草文が描かれている。高台は共に貼り付け高台である。(533) は伊万里焼の仏飯具で、台部底面は切り離し後ヘラで削り出している。

備前焼 (538) 特異な口縁を持つすり鉢である。口縁はナデによるつまみ上げののち2回にわたるヘラ状工具によるナデにより見た感じでは波状を呈する。体部下半には指頭痕がそのまま残る。内面はナデによる平滑化ののち単位5本のスリ目が内底縁辺から28回上方に掻き上げられている。内底には「米」字状に単位3本のスリ目が引かれたのち周縁に体部と同一工具によるスリ目が円周している。

丹波焼 (539) は口縁が玉縁状になりかけた大形の壺である。

土師質皿 (540—546) (540—544) は根来寺通有のものである。(545, 546) は共に指頭痕がナデにより丁寧により消されている。(546) は白色系土器にみられるように口縁のナデの際内底の一部までナデするため、内底周縁部が盛り上っている。

S D—8 (図35—547—576)

青磁 (547—550) (547) は浅い片切彫りの鍋蓋弁をもつ椀である。(548, 549) はいずれも鉢の底部であるが(548) は軸が高台内側におよぶ。(549) は疊付部の釉を削り取っている。いずれも削り出し高台である。(550) は端反りの口縁をもつ鉢である。体部の回転ヘラ削り痕が釉上から見る事ができる。

美濃瀬戸系陶器 (551, 552)

天目茶椀 (551) は肩部で屈曲し、垂直に立ち上り再度強く外反する口縁をもつ。

おろし皿 (552) は3足が付くもので内底に粗く深いおろし目が引かれている。

土師質土器 (553～573、578) 中皿 (553～563)、小皿 (564～573)に分けられると共に赤土器 (553～557、563、567、570)、白土器 (558～560、568、569、571～573)とに分けることができる。赤土器中皿は口縁部のナデの強いもの (553、554、556、567) と弱いもの (555) とがあるがいずれも丸味を帯びた底部になる。白土器中皿は、いずれもナデが強く底部は平らである。赤土器小皿は浅いもの (564) と深いもの (565) ヘソ皿に近い器形を呈すもの (566、567、570) がある。白土器小皿はいずれも口縁部のナデが強く浅いものである。(578) は体部が「く」の字状に外反し口縁端部を内側につまみ出した鍋である。

瓦器 (574) 断面三角形の貼付高台をもつ小椀で指頭痕が残る。

瓦質土器 (575、577、579～581)

(575) は、3足を付す火舎風の作りをもつが底部中央に孔を穿っている。(575、580、581) は瓦質のこね鉢である。(579) は、比較的幅のある鐏をもつ羽釜で口縁部に3条の凹線をもつ。鐏以下体部は横方向へへら削りされている。内面は口縁部にのみ横あるいは右上りの刷毛調整が施されている。

軒丸瓦 (576) は左廻りの巴文を持ち外に珠文を配するものである。

S D-9 (図37～図39—582～589)

青磁 (582) 口縁部は端部が丸く肥厚し、直口する椀である。

土師質皿 赤土器 (583、585) と白土器 (584) に分けることができる。(583) は口縁のナデ以下に顕著に指頭痕が見られる。(585) は口縁端部近くで肥厚し、口径に比してやや深い感がある。(584) は口縁部に強いナデが2段見られる。

瓦 (586～589) (586) は内厚の平瓦で斜格子のタタキがみられる。(587) は両面に砂が付着するが裏面には調整が認められない。表面はへらで砂を削り取っている。(588、589) は丸瓦片であるが全長は不明である。作りは大きい (図33—528) と同様である。

S D-10 (図40—590～593)

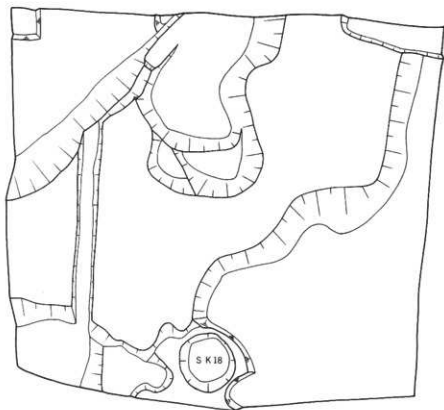
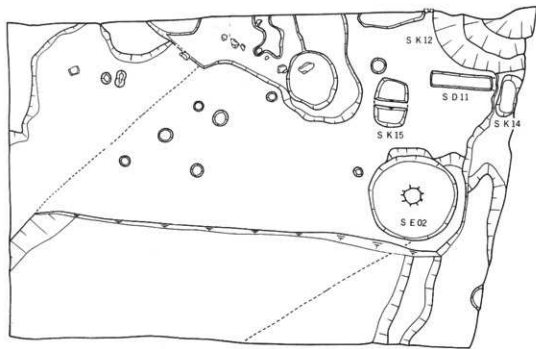
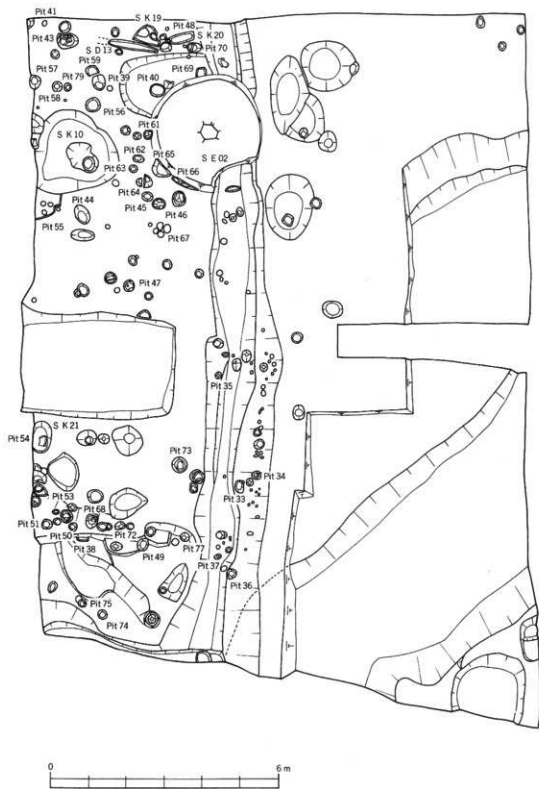
瓦質土器 こね鉢 (590) は内面に刷毛調整のちスリ目を施したもので、外面は縦方向に比較的細いへら削りが施されている。

土師質土器 (591～592) 赤土器の中皿 (591) と小皿 (592) である。いずれもそれほど強くないナデにより調整されているが指頭痕は顕著でない。

瓦 (593) 作りは (図37—587) と同じ作りである。

S D-14出土遺物 (図41～図43—594～623)

青磁 (594、595) いずれも碗の底部である。(594) は内面見込みには花卉の中に字をあしらったものが4ヵ所印花されている。両者とも軸は高台内側にはかからない。(595) は体部外面下方に1条の沈線がある。



第18図 NG83-2 最終遺構面平面図

美濃瀬戸系陶器 (596) 口縁部を外側に引き出したおろし皿である。

土師質皿 (597～610) 大皿 (597、598) と、赤土器中皿 (599、600)、白土器中皿 (601～603)、赤土器小皿 (605～607、609、610)、白土器小皿 (603、608) がある。

土師質鍋 (612) 体部から大きく外反する口縁をもつもので口縁端部は上方に引き上げられている。内面は頸部以下に粗いハケ目調整が右下りに施されている。(611) は羽釜である。

瓦質土器 (613～620) こね鉢で、口径30cm以下のもの (613、617) とそれ以上の大形品とがある。

東播系須恵質土器 (621、622) 口縁が玉縁状になったもの (622) と口縁端部を上方に引き上げたもの (621) とがある。

常滑焼 (623) N字口縁をもつ甕である。

板碑 (図44—624) 下部は欠損しているが、梵字の下に「曆応四」の文字が彫られている。砂岩製である。

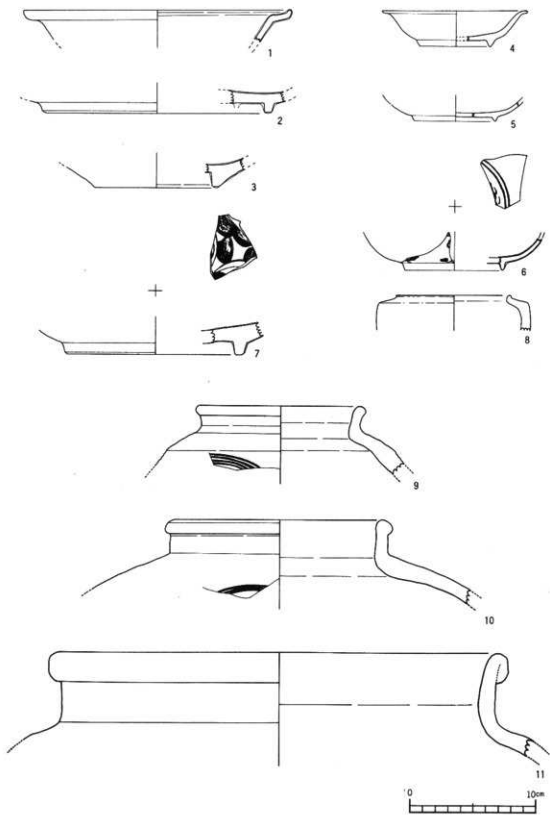


图 1

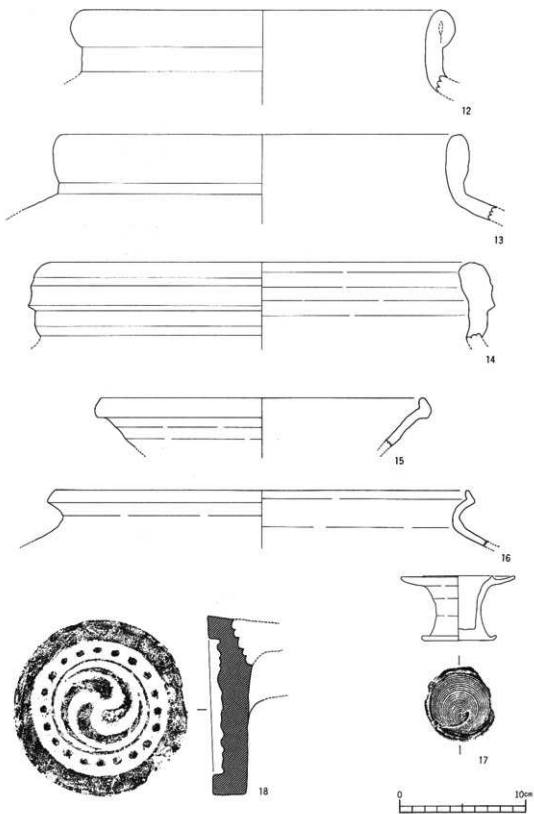


图 2

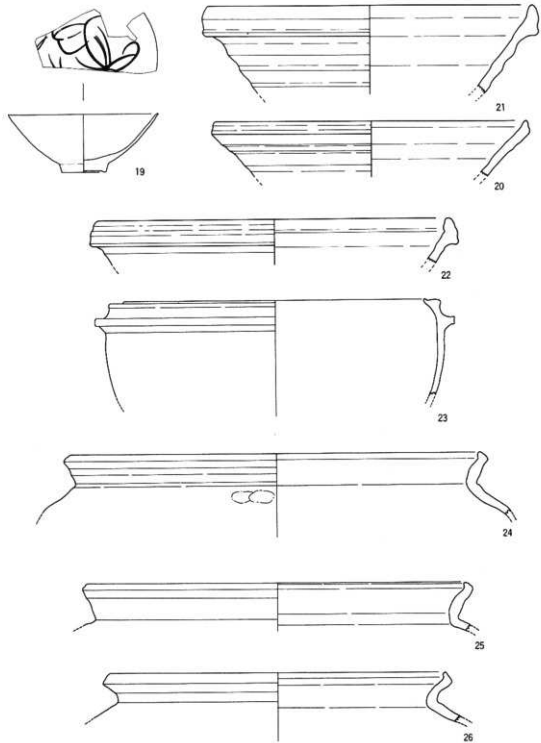


图 3

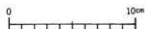
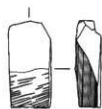
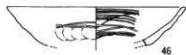
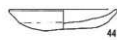
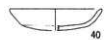
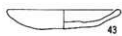
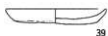
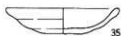
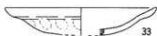
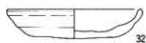
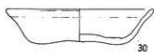
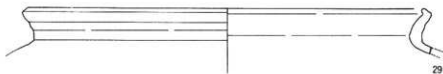
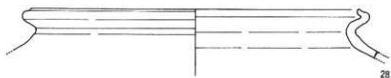
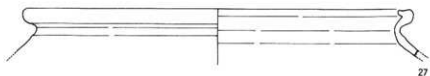


图 4

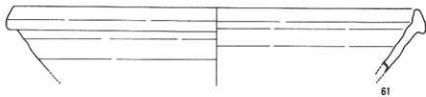
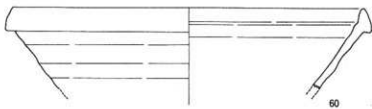
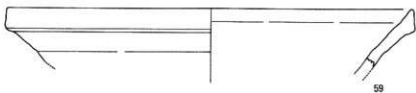
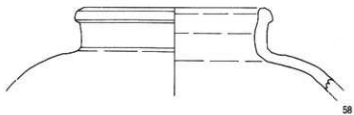
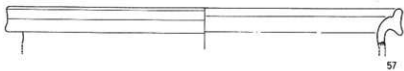
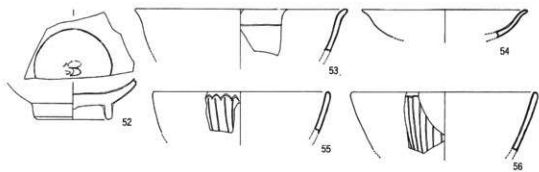


图 5

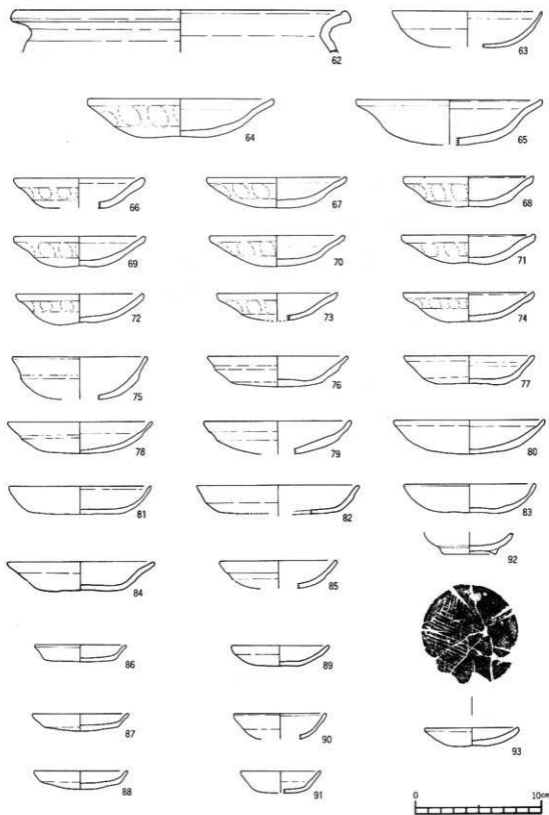
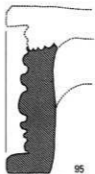


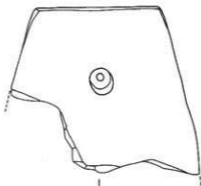
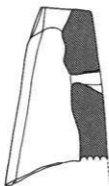
图 6



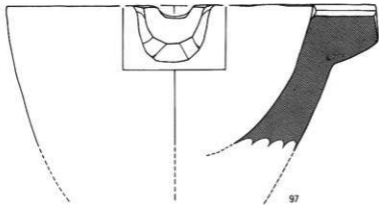
94



95



96



97



图 7

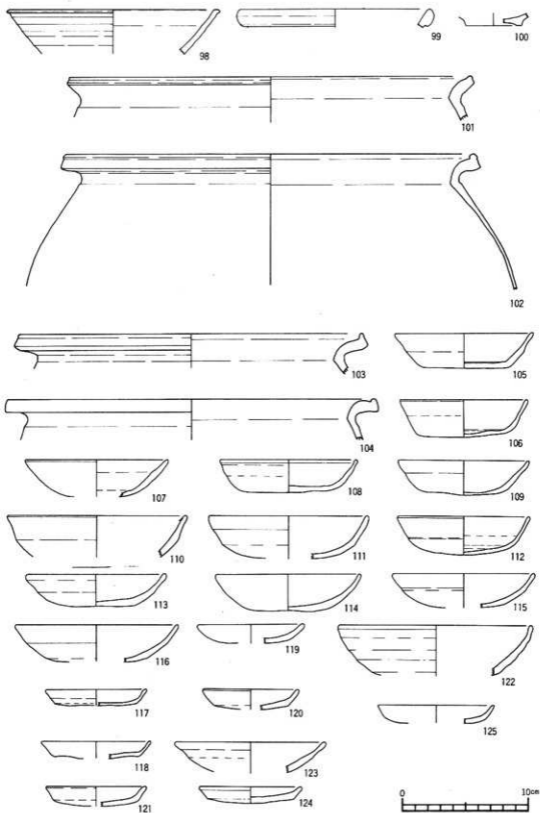


图 8

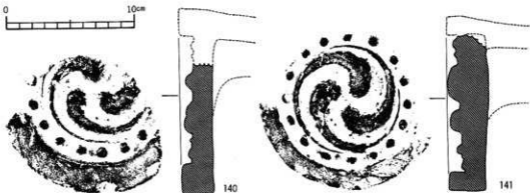
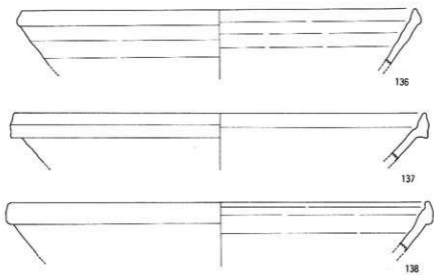
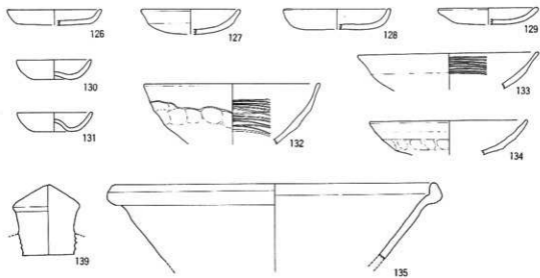


图 9

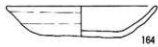
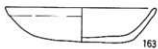
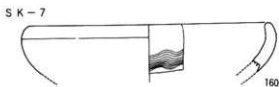
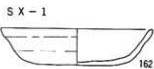
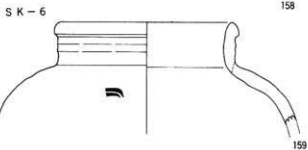
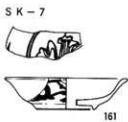
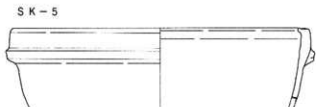
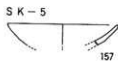
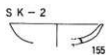
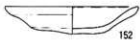
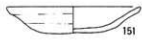
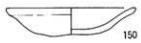
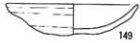
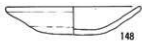
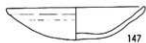
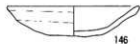
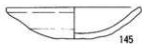
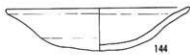
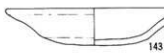


图10

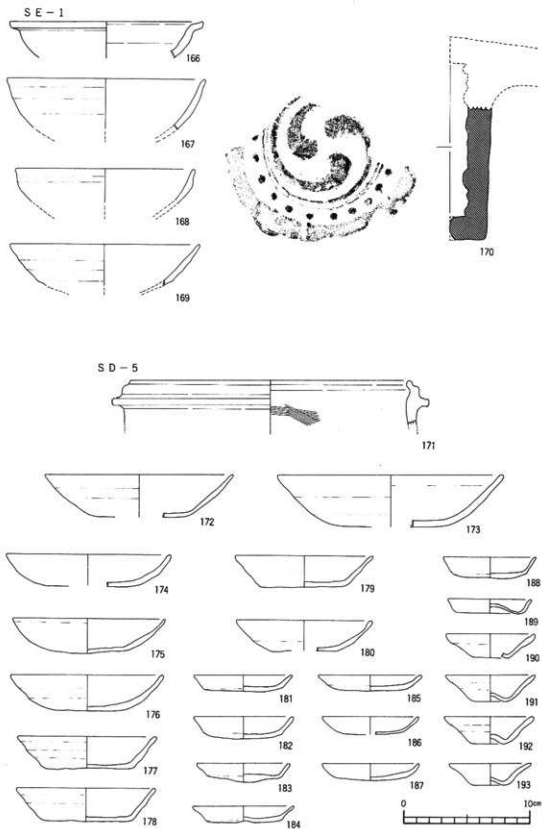


图11

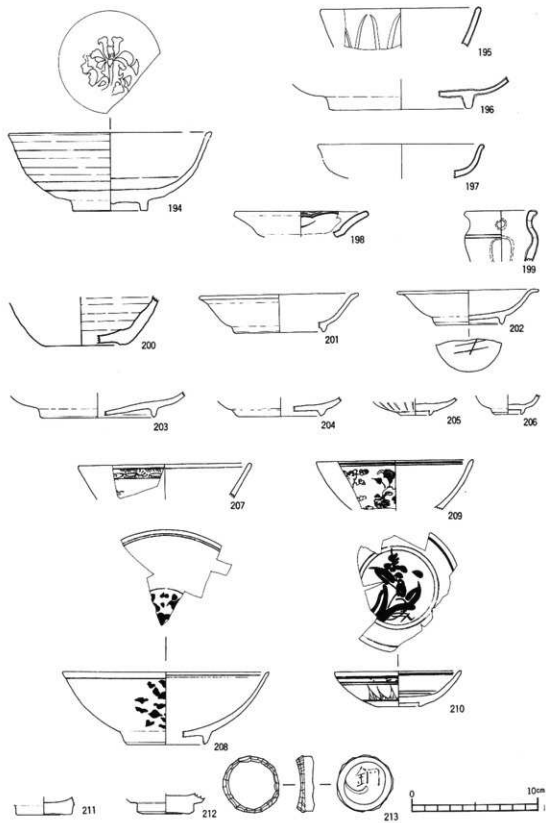


图12

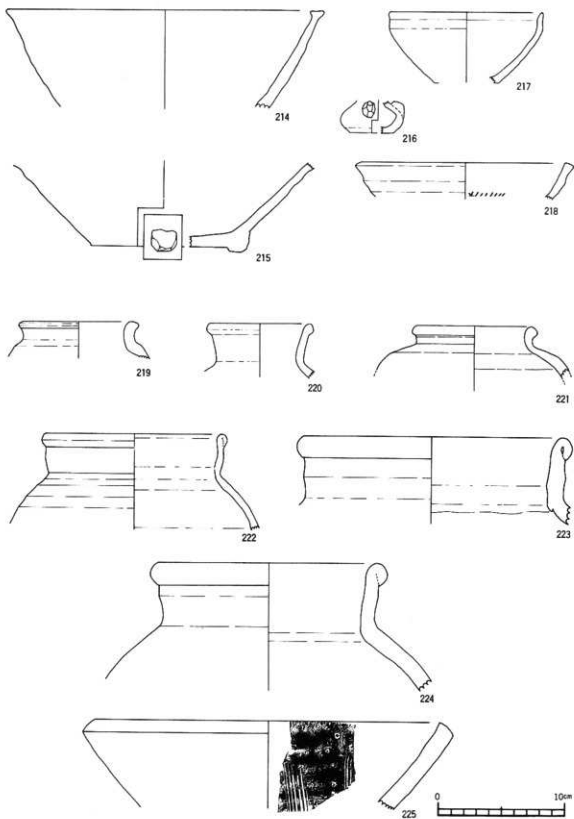


图13

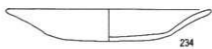
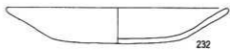
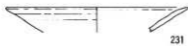
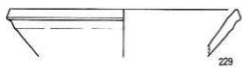
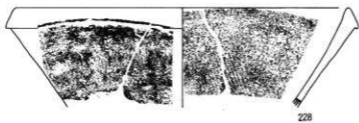
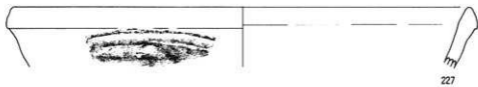
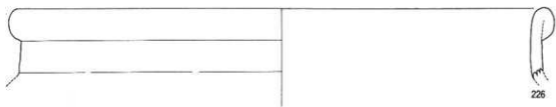


图14

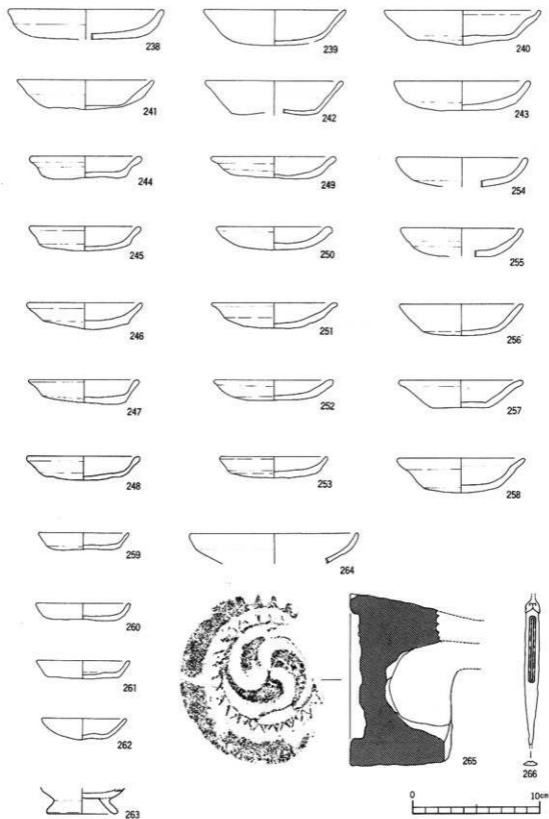


图15

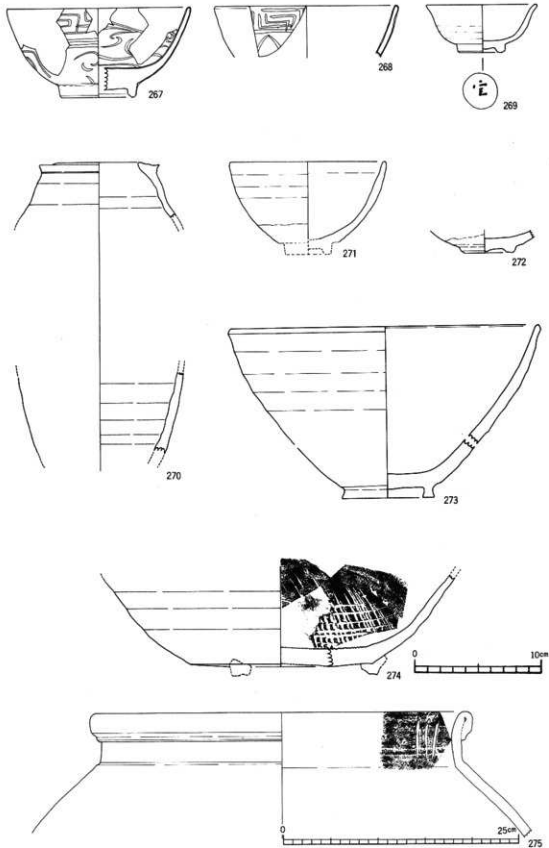


图16

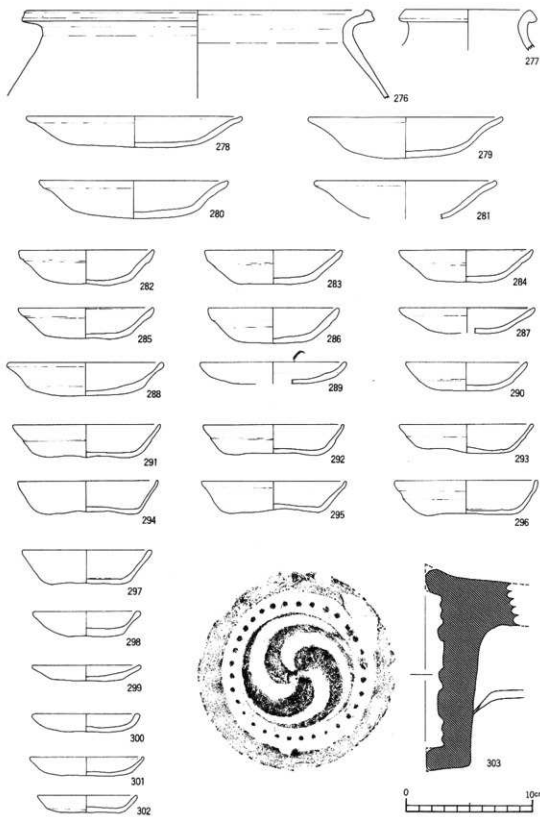


图17

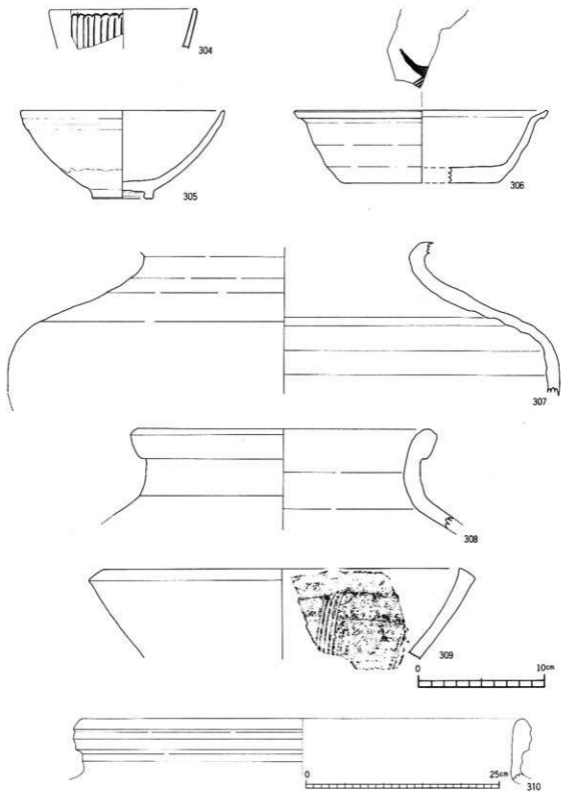
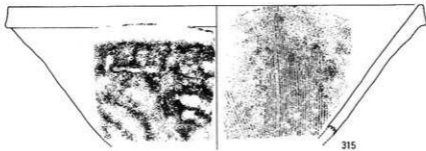
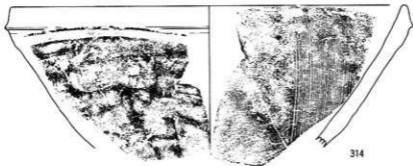
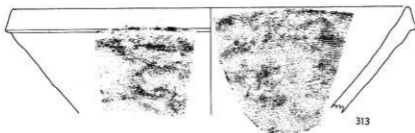
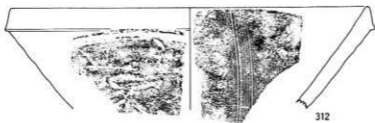
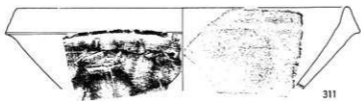
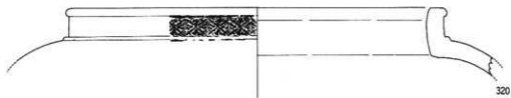
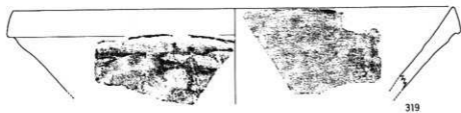
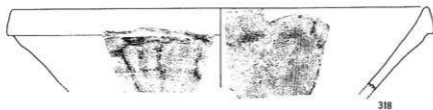
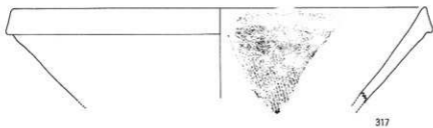
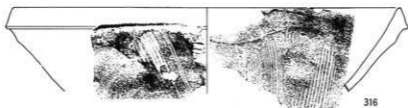
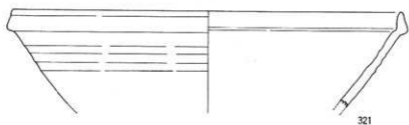


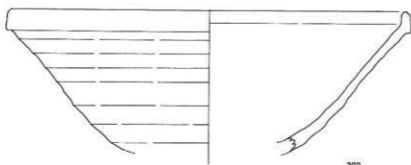
图18



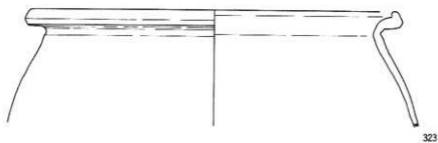




321



322



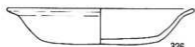
323



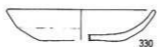
324



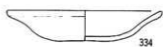
325



326



330



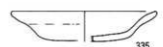
334



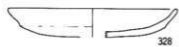
327



331



335



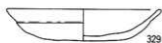
328



332



336



329



333

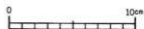


图21

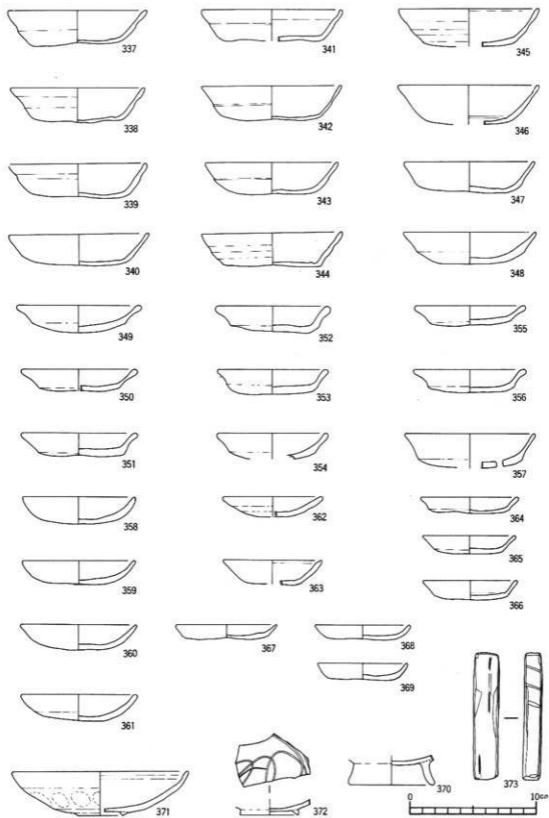
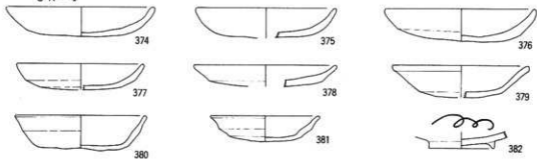
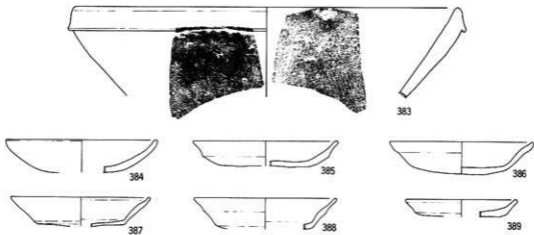


图22

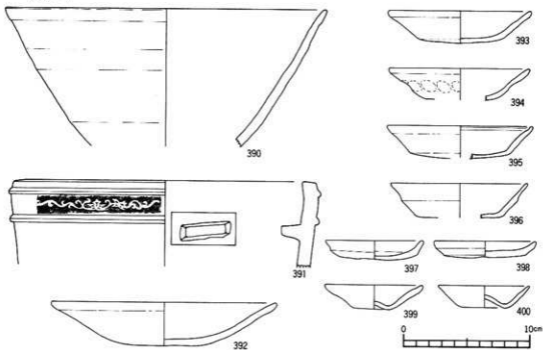
S K - 1



S K - 2



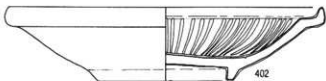
S K - 3



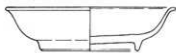
SK-5



401



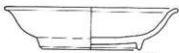
402



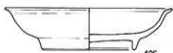
403



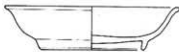
404



405



406



407



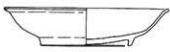
408



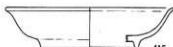
409



410



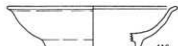
411



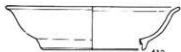
415



412



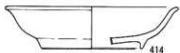
416



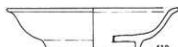
413



417



414



418



图24

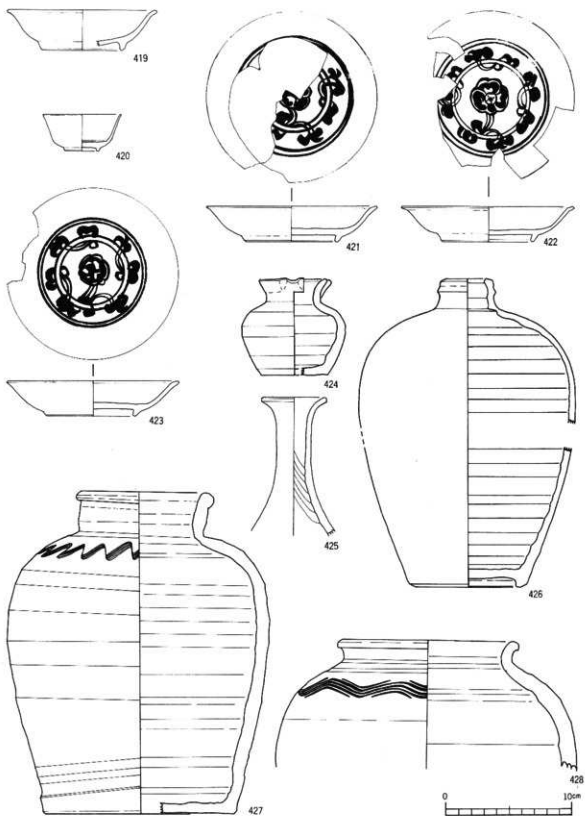
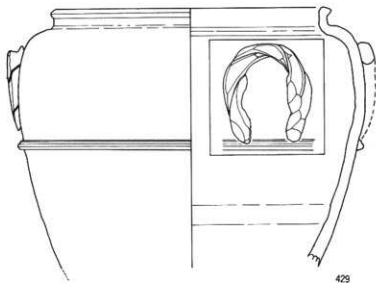
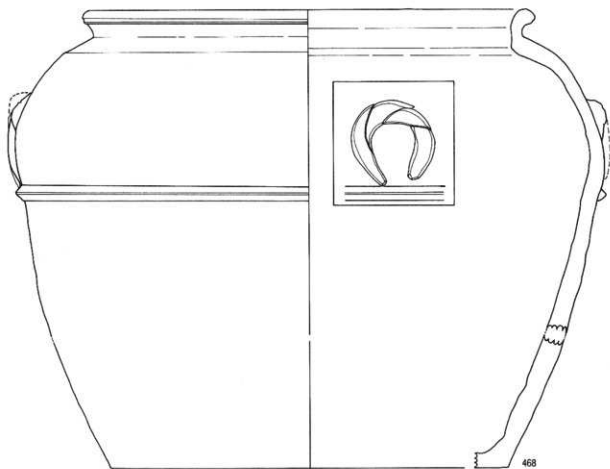


图25



429



468



图26

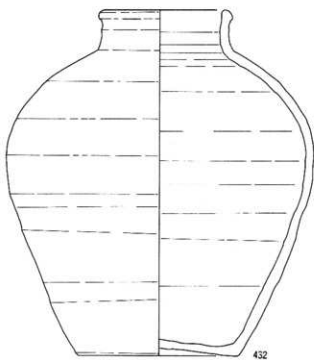
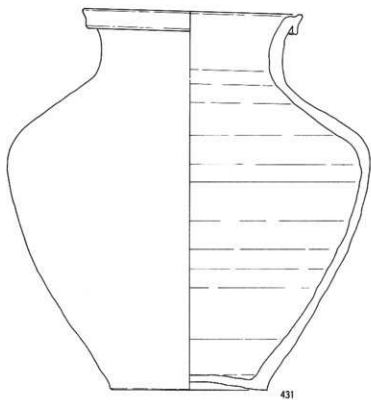


图27

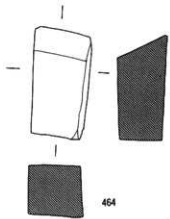
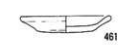
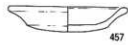
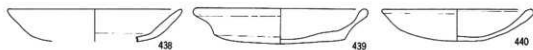
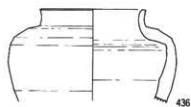
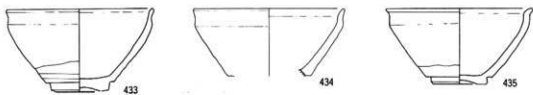
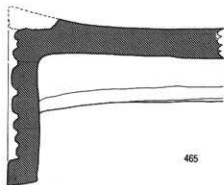
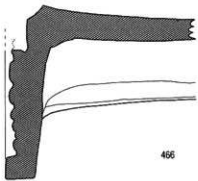


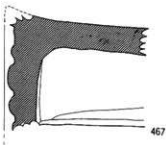
图28



465



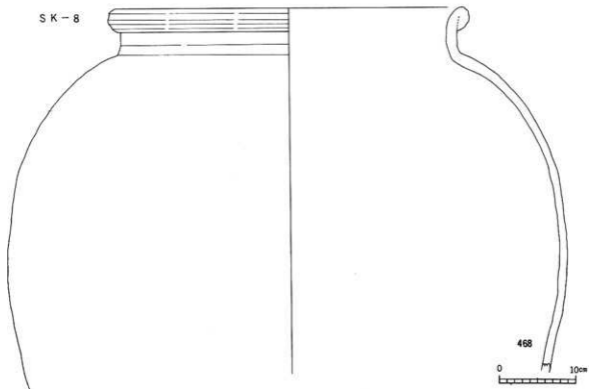
466



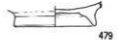
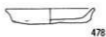
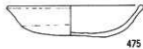
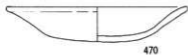
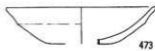
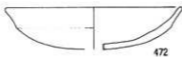
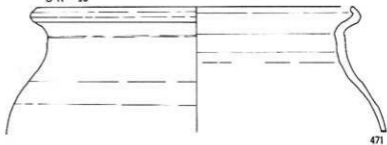
467



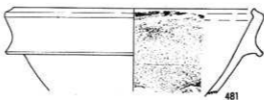
S K - 8



S K - 10



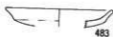
S K - 11



481



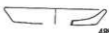
482



483



484

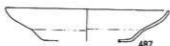


485

S K - 18



486



487



489



490



491



492

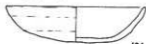


493

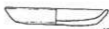


488

S K - 19

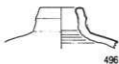


494

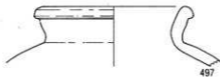


495

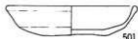
S E - 1



496



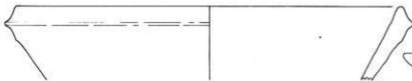
497



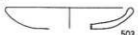
501



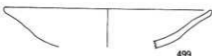
502



498



503



499



500

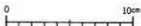
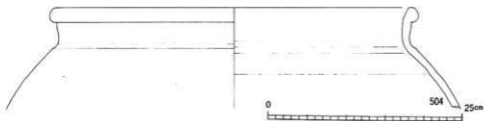
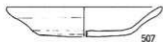
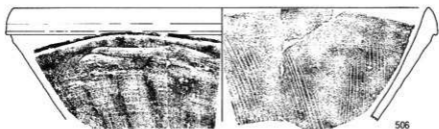
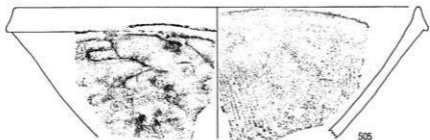


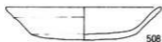
图31



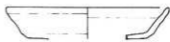
S F - 1



507



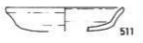
508



509



510



511

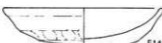


512

地鎮 1



513



514



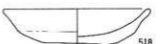
515



516



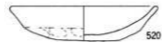
517



518



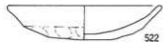
519



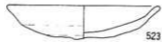
520



521



522



523



524



525



526

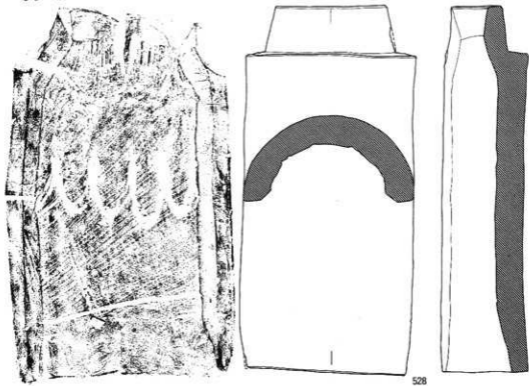


527



図32

SD-3



528

SD-4

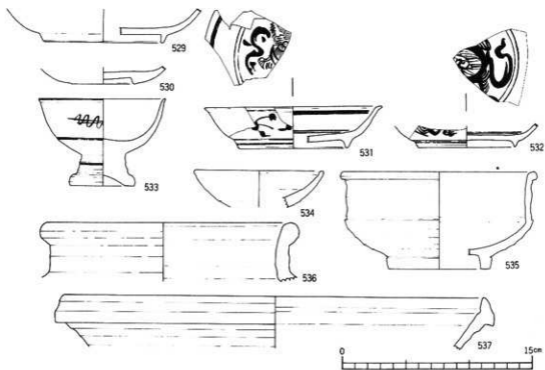


图33

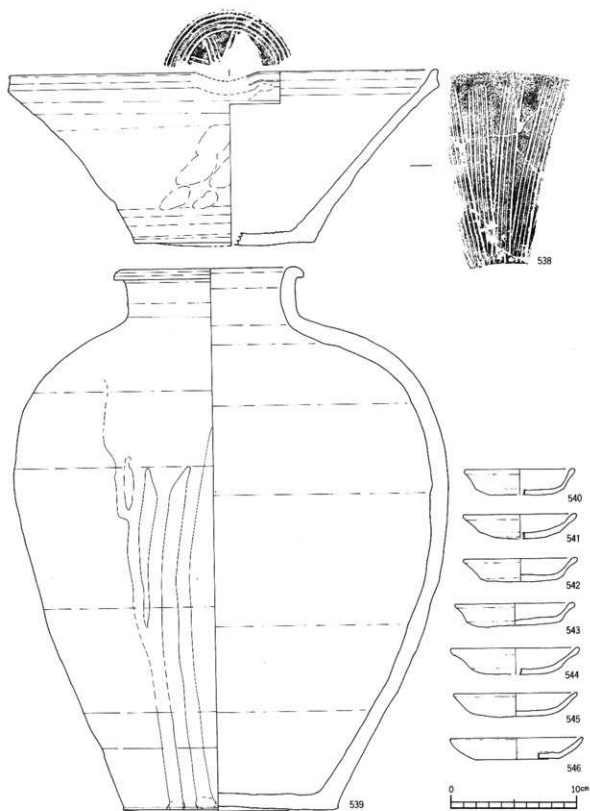
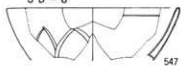


图34

S D - 8



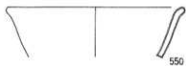
547



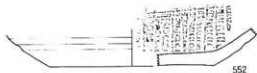
548



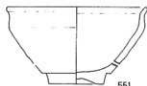
549



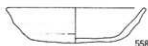
550



552



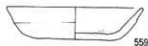
551



558



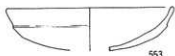
567



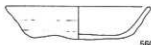
559



568



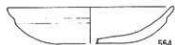
553



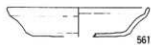
560



569



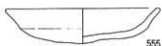
554



561



571



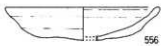
555



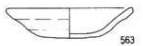
562



572



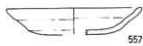
556



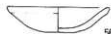
563



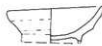
573



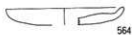
557



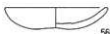
566



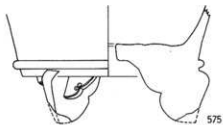
574



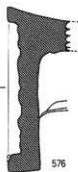
564



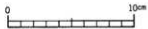
565

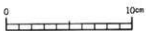
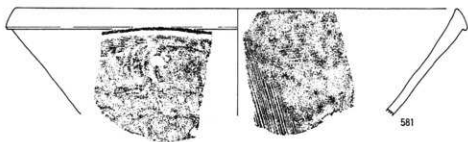
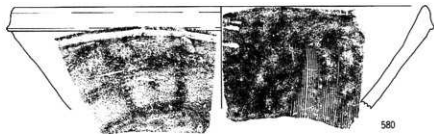
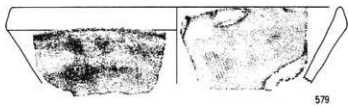
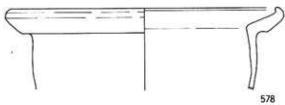


575



576





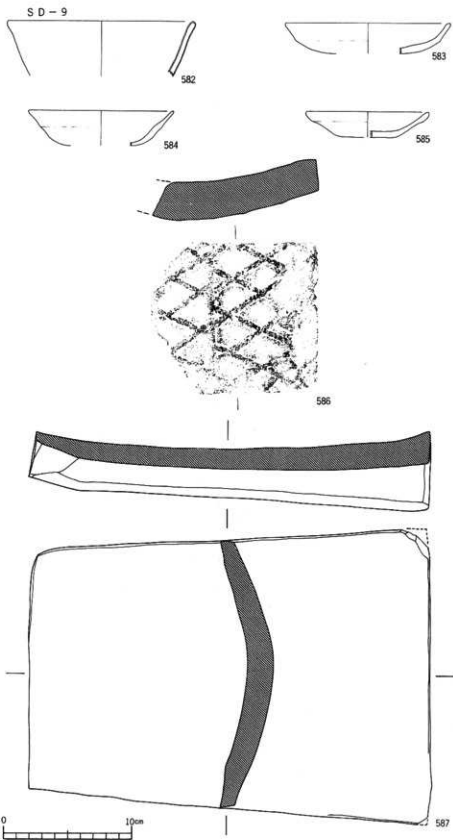
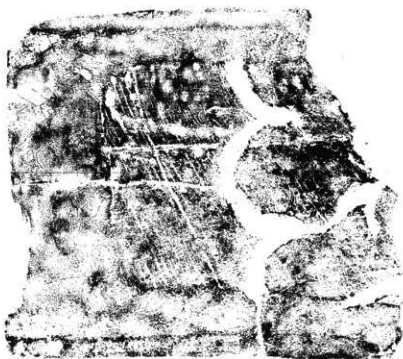
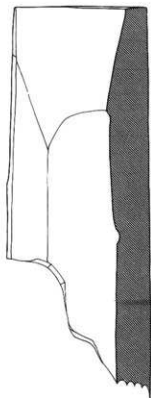
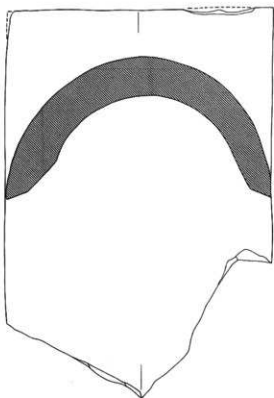
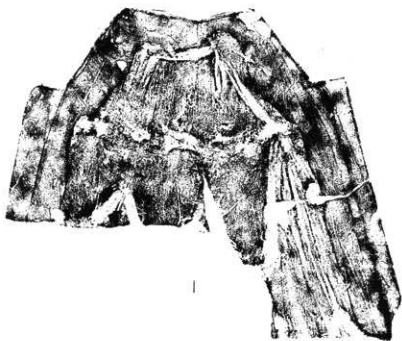
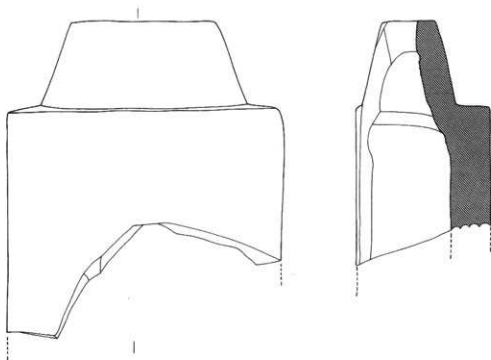


图37

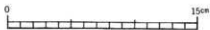


588

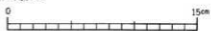
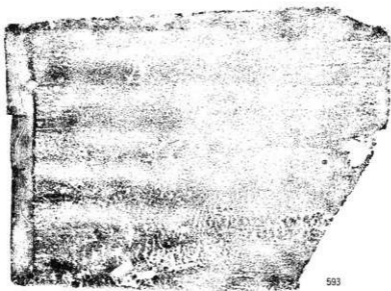
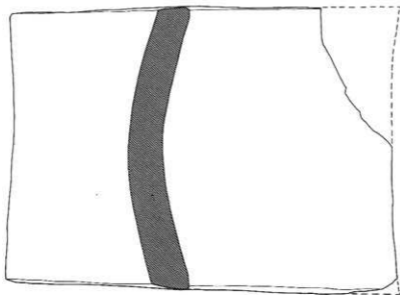
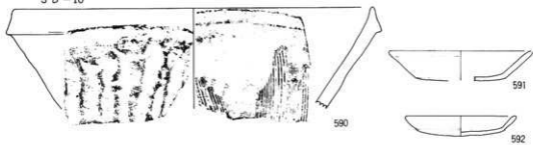




589



S D - 10



S D - 11



594



596



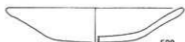
595



597



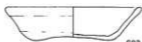
599



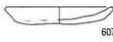
598



600



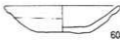
603



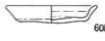
607



601



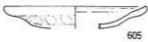
604



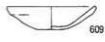
608



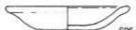
602



605



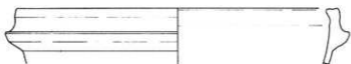
609



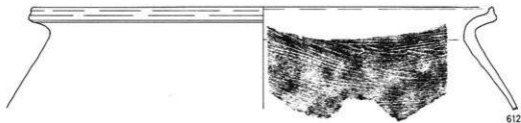
606



610

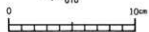
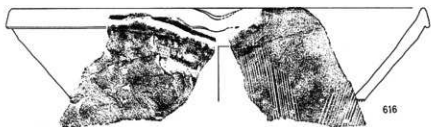
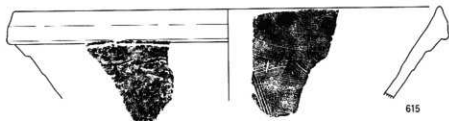
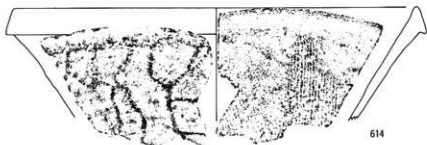
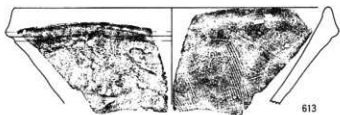


611



612





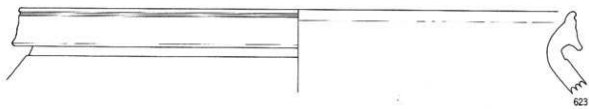
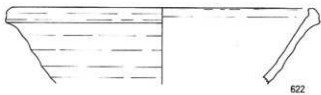
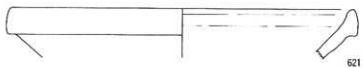
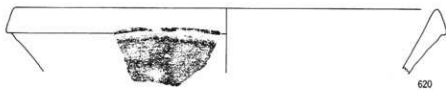


图43

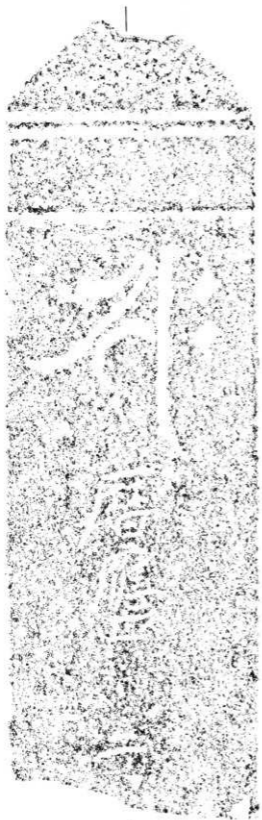
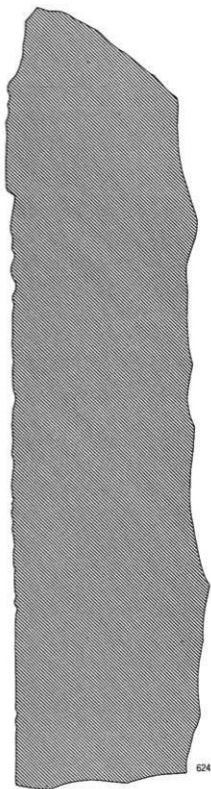


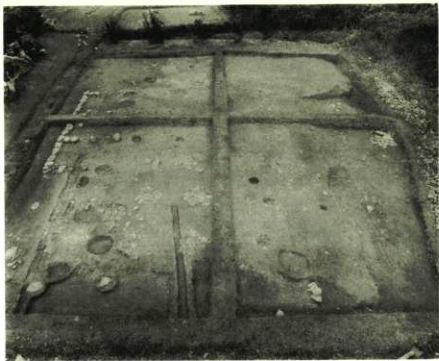
图44



624



圖 版



1 第1次遺構面全景



2 第1次遺構面全景



1 第1次SE-1 蓋石及石墩



2 第1次SE-1



1 第1次鎮壇具出土状態



2 第1次西北区最終掘り上り状態



1 第1次SV2



2 第1次西南区最終掘り上り状態



1 第1次SD-5、SX-1 検出状態



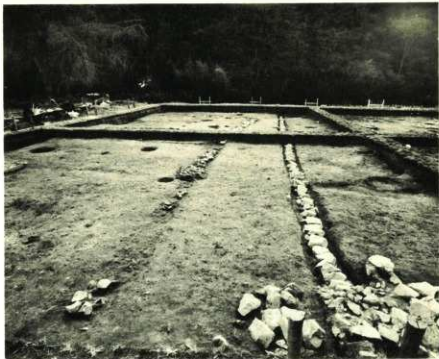
2 第1次SX-1



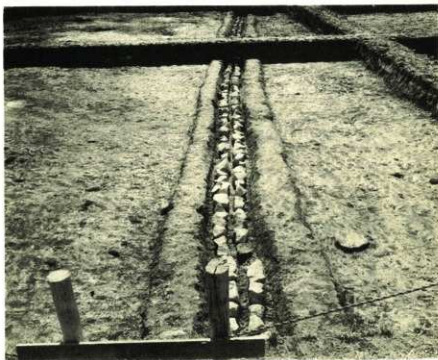
1 第2次遺構面全景



2 第2次遺構面全景



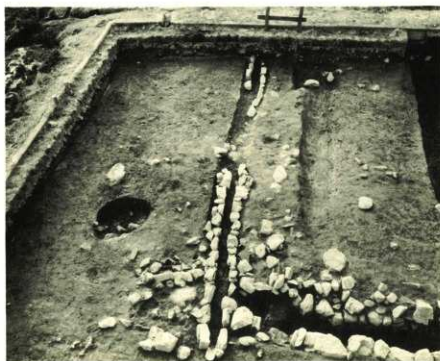
1 第2次SD-4、SD-5検出状態



2 第2次SD-5掘り上り状態



1 第2次遺構面西南部細部



2 第2次S D-3 検出状態



1 第2次SE-1



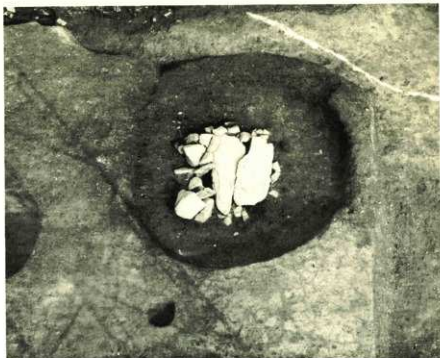
2 第2次SK-5



1 第2次SD-8、SF-1検出状態(北から)



2 第2次SD-8、SF-1検出状態(東から)



1 第2次SE-2 蓋石状況



2 第2次SE-2



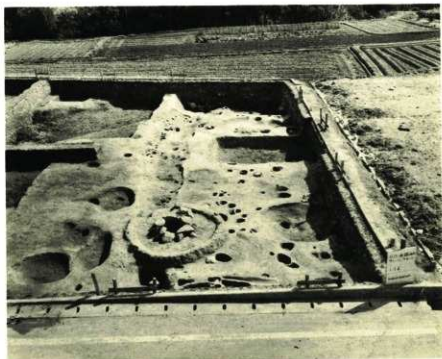
1 第2次 SF-2



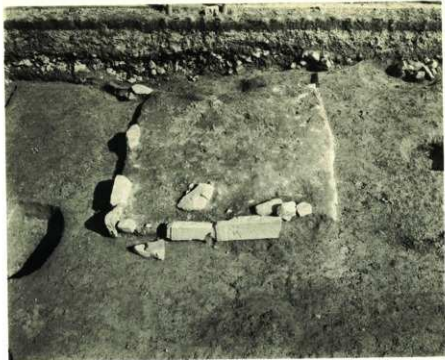
2 第2次最終遺構面検出状況



1 第2次最終遺構面（東から）



2 第2次最終遺構面（北から）



1 第2次基壇状遺構



2 第2次S K18漆塗碗出土狀態



1 第2次地鎖2檢出狀態



2 第2次地鎖1檢出狀態



1



7



3

2



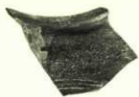
5

4



6

8



9



10



11



14

13

12



15



16



17



19



20



21



22



23



26



28



27



24



25



29



30



31



32



34



33



44



39



40



35



36



37



38



41



42



43



45



46



47

51



48



49

50



53

54



55

56



58



57



60



61



59



62



75



65



63



66



79



67



70



64



69



76



72



83



81



80



84



82



89



78



93



86



88



87



90



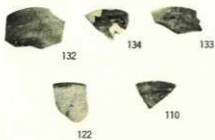
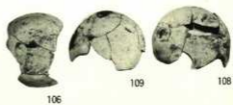
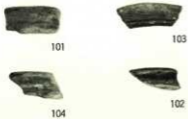
91



95



92





114



112



113



117



118



126



124



125



121



127



128



129



130



131



135



137



138



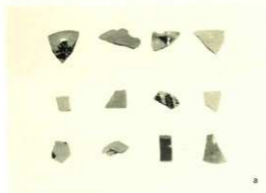
139



140



141







a



b



c



d



e



f



a



b



c



d



e



f



g



142



143



144



145



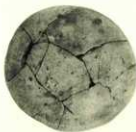
146



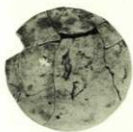
147



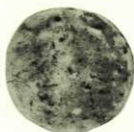
148



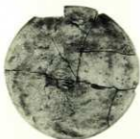
149



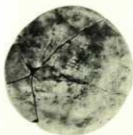
150



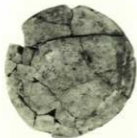
151



152



153



154



155



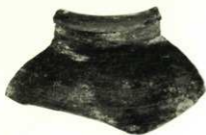
156



157



158



159



160



161



162



163



164



165



166





177



178



179



181



182



183



184



185



186



187



188



189



193



190



191



192



197

198

195



196

199



200

206



204

205



201



203



208

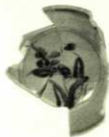
207



209



202



210



211



212



213



214



215



216



217



218

a





228



229



230



231



241



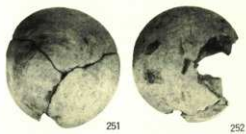
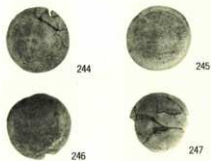
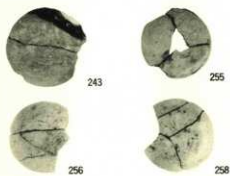
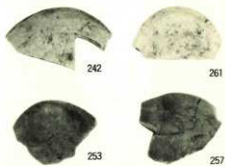
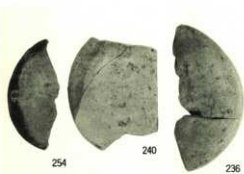
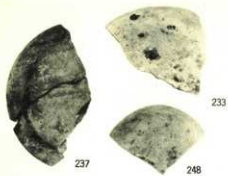
239



232



234





259



260



262



263



264



266



268



267



269

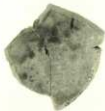


270

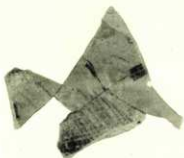
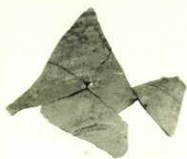


271

272



273



274



275



276



277



278



280



279



295



300



266



289



286



288



301



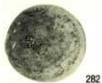
281



284



285



282



283



299



287



290



302



293



294



291



292



296



297



298



304



305



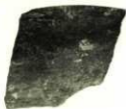
306



307



308



309



310

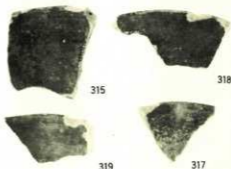


312



313

311



315

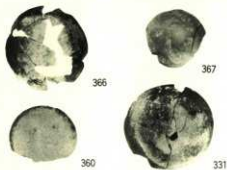
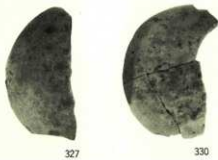
318

319

317



316





349



353



351



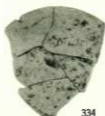
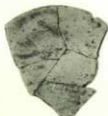
359



333



361



334



370



336



358



357



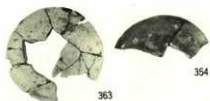
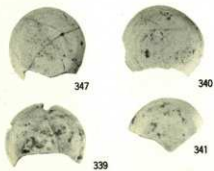
352



355



356



372



371





194



582



549



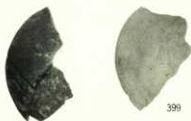
52



547



306





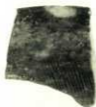
386



384



388



383



390



392



393



395



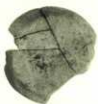
394



396



397



398



400



399



a



402



413



417



403



404



405



406



407



408



409



410



411



412



415



418



416



414



420



419



421



422



423



426



424



425



432



430



431



435



433



434



438



439



440



453



458



441



451



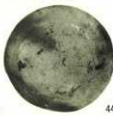
442



443



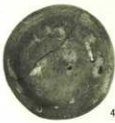
445



448



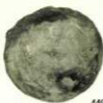
447



446



454



449



450



456



455



460



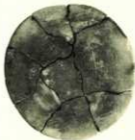
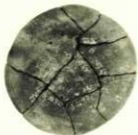
463



464



468



469



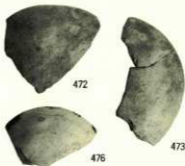
470



475



477



472

476

473



474



479



478



481



a



482



487



486



495



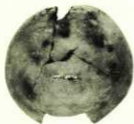
494



496



498



501



499



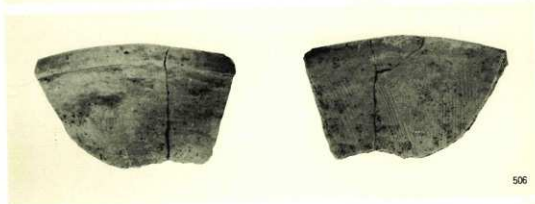
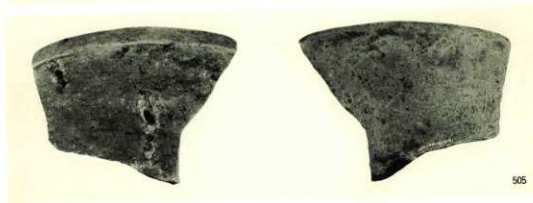
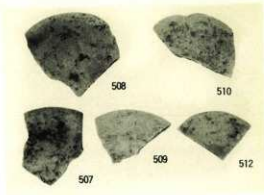
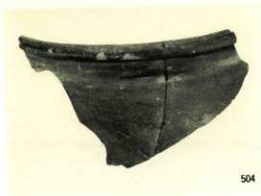
510



502



503

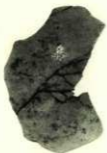




514



515



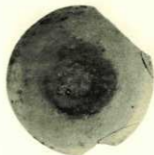
516



517



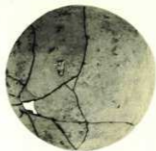
518



519



520



521



523



524



a



530



531



532



533



536



534



537



538



541



544



540



542



543



545



546



a



b



c



d



e



a



b



593



c



592



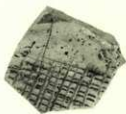
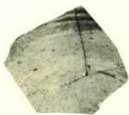
591



551



548



552



550



553

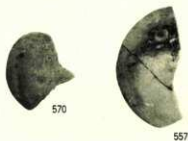


565

554



555





568



569



571



572



573



574



577



579



616



613



614



617



580



581



578



a



b



594



595



596



604



602



608



599



607



605



606



600



598



610



612



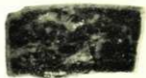
609



623



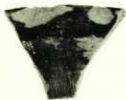
622



619



615



a



b



626



625



627

昭和58年度
根来寺坊院跡

編集 和歌山県教育委員会
発行 和歌山県教育委員会
印刷 真 陽 社